

チェコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

KAYANO, Haruo / カヤノ, ハルオ / 栢野, 晴夫

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

203

(終了ページ / End Page)

260

(発行年 / Year)

1960-12-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017552>

チェコスロバキア社会主義共和国における

農業生産及び生産組織

栢野晴夫

一 序 説

チェコスロバキアは東ヨーロッパの中で、もっとも高い文化と、発達した経済とをもち、東ヨーロッパはもちろん西ヨーロッパ全体の中でも注目すべき位置を占めている。日本においては、ドヴォルジャックやスメタナの国として知られてはいるが、この国の経済構造や社会組織についての研究は尚きわめて寥々たるものである。

ここでは、その意味でこの国の農業生産及び生産組織についての概貌を伝えてみたい。

チェコの現代史が、きわめて波乱に満ちたものであることは衆知のごとくであるが、一九三九年三月以来ナチスの全面的占領下におかれたチェコは、第二次大戦開始の当初から、各地で解放軍を組織、ナチス占領下のチェコ解放のために闘い、ソ連軍の進撃を援助、一九四四年のスロバキアの民族的蜂起、一九四五年五月のチェコ人民の蜂起と相呼応して、遂にナチスを放逐し、独立を達成したのである。^(註一)これが「平等の権利をもつ二つのスラブ民族、チェコ人とスロバキア人の単一国家である」^(註二)「チェコスロバキア共和国」、「人民民主主義共和国」^(註三)であった。

その後、一九四八年二月に、資本主義的反革命分子によるクーデターが企図されたが、これを撃破、社会主義建設は順調にその軌道を進んだ。

昨年六月総選挙が行なわれ、その結果成立した新国会は、チェコにおいて、人民民主主義が成功をおさめ、資本主義社会から社会主義社会への移行の基本的事業はすべて解決され、解放された労働が、チェコの社会全体の基礎となり、すでにいまや、「各人からその能力に応じて、各人にはその労働に応じて」という社会主義の原則が実行されているとして、^(註四)新憲法を採択、チェコスロバキア社会主義共和国の誕生を宣言したのである。

従って、チェコの農業もまた、この様なチェコの現代史の流れに沿って展開してきたものであることは、ここに改めて説くまでもないことである。

註一 アントニン・シュネイダレク「チェコスロバキアの歴史」、S・ドフスキー著岡田勝定訳「チェコスロバキア現代経済史」一九六〇年五月刊所収、九九頁～一〇九頁参照。

註二 一九四八年憲法第二条第一項。前掲書一一〇頁。

註三 同第一条第一項。前掲書一一〇頁。

註四 チェコスロバキア社会主義共和国憲法前文。日本チェコスロバキア協会「日本とチェコスロバキア」第六号参照。

二 チェコスロバキアにおける農地及び農業地帯

チェコスロバキアにおける産業諸部門中、農業は工業に次いで、経済上重要な位置を占めているわけであるが、その基本条件たる土地利用面積を、年次別に共和国全体と、チェコ地方、スロバキア地方とに對比してみると、第1表に見る如く、先ず国土総面積と各地方の総面積については、一九四九年以降、各々変化なく、一九五九年、共

第1表 “年次別”・“地域別”土地利用面積

	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959
共 和 国	積地	12,786	12,786	12,786	12,786	12,786	12,786	12,786	12,786	12,786	12,786
	園地	7,548	7,514	7,506	7,474	7,455	7,215	7,294	7,377	7,336	7,389
	林地	5,218	5,136	5,095	5,100	5,097	5,007	5,095	5,156	5,119	5,119
総農 業	草牧	1,153	1,131	1,122	1,110	1,098	1,068	1,093	1,099	1,099	1,083
	放牧	932	999	973	952	927	886	842	869	869	861
	用地	19	18	19	19	18	18	19	23	22	22
非 農 業	積地	7	8	9	10	10	9	9	8	8	8
	園地	5,162	5,259	5,253	5,301	5,325	5,305	5,411	5,316	5,349	5,392
	林地	4,157	4,201	4,218	4,244	4,249	4,169	4,311	4,306	4,329	4,348
チ エ コ 地 方	積地	49	50	49	52	51	49	52	51	51	52
	園地	7,886	7,886	7,886	7,886	7,886	7,886	7,886	7,886	7,886	7,886
	林地	4,744	4,729	4,769	4,666	4,676	4,572	4,615	4,667	4,640	4,612
総農 業	草牧	3,490	3,425	3,362	3,368	3,358	3,315	3,387	3,418	3,387	3,383
	放牧	726	726	710	706	709	699	716	738	728	716
	用地	367	409	376	366	365	369	316	302	316	318
非 農 業	積地	6	6	6	7	6	6	7	7	7	6
	園地	7	8	9	10	10	9	9	9	8	8
	林地	3,076	3,148	3,186	3,214	3,209	3,099	3,196	3,175	3,203	3,231
ス ロ バ キ ア 地 方	積地	2,427	2,478	2,507	2,529	2,529	2,403	2,511	2,540	2,540	2,562
	園地	48	49	48	51	50	48	51	50	50	51
	林地	4,900	4,900	4,900	4,090	4,900	4,900	4,900	4,900	4,900	4,900
総農 業	草牧	2,804	2,785	2,827	2,808	2,779	2,643	2,679	2,747	2,737	2,724
	放牧	1,728	1,711	1,734	1,732	1,739	1,692	1,708	1,738	1,732	1,736
	用地	427	405	412	404	389	369	377	372	371	367
非 農 業	積地	565	590	597	586	562	517	526	554	553	543
	園地	13	12	13	12	12	12	12	16	15	16
	林地	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

註 1. Státní Úrad Statistický Republiky Československé, “Statistická ročenka Republiky Československé 1959.”
P. 224より作成。
2. 単位は1,000ヘクタール。

チエコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

和国全体で一、二七八万六千ヘクタール、チェコ地方七八八万七千ヘクタール、スロバキア地方四八九万九千ヘクタールとなっている。チェコ地方が、総面積の六二・五％、スロバキア地方が三七・五％を各々占めていることになる。

農用地面積の占める割合は、このうち共和国全体では、一九五九年、五七・八％、七三三万六千ヘクタール、チェコ地方五八・四％、四六一万三千ヘクタール、スロバキア地方五六・七％、二七七万六千ヘクタールとなり、いずれも土地の農業的利用度が極めて高いことを示している。農用地面積の年次別変化については、いずれの地方も、それ程顕著な増減はなく、殆ぼ一九五四年を境として、それ迄は漸減の傾向を示し、それ以後再び漸増の気配をみせているが、いずれにしても、全体として極めて安定した高い利用度を示していることが明らかである。共和国全体についてみれば、一九四九年を一〇〇とすれば、最低の一九五四年が九五・七、一九五九年が九八で、僅かに二％の差を示すに過ぎない。

次に農用地面積の内訳をみると、一九五九年において、耕地総面積五一万三千ヘクタール、このうちチェコ地方に三三八万七千ヘクタールが、スロバキア地方に一七六万六千ヘクタールが属しており、それぞれ農用地面積の六九・七％、七一・四％、六三・六％を占め、全国でも、地方別でも耕地面積の比重が非常に高い。このことは、チェコスロバキアにおいて、耕種農業の地位が極めて高いことを思わせるが、それは必ずしも市場向耕種生産が活発に行われているということを意味するのではなくて、酪農経営との組合せにおける飼料生産を含んでいる結果であることに注意しておく必要がある。^(註二)

耕地面積以外のものの割合は次に示す如くである(第2表)。これによると、耕地に次いで牧草地の占める割合が

第2表 農用地面積利用別割合

	共 和 国	チエコ地方	スロバキア地方
農用地総面積	100.0	100.0	100.0
耕地	69.7	71.4	63.6
牧草地	15.0	15.5	14.1
放牧地	11.3	6.3	18.9
葡萄園	3.3	1.5	6.1
ホップ園	1.0	1.7	0

註 1. 第1表から作成

一五%前後となっているが、放牧地については地方差が著しく、スロバキア地方は、チエコ地方の殆ぼ三倍の面積比率であることが分る。葡萄園についても同様で、スロバキア地方の比率がチエコ地方に比して著しく高い。ホップについてはこれと逆で、チエコ地方のみに産し、スロバキア地方にはみられない。しかし、葡萄園にしても、ホップ園にしても、その実面積は総計で各々、二万四千ヘクタール、八千ヘクタールを占めるに過ぎない。

耕地面積の内訳についての年次別変化の点は、農用地面積全体の傾向と殆ぼ同じく、スロバキア地方における葡萄園の復興が眼立つ程度であるといつて良いであらう。

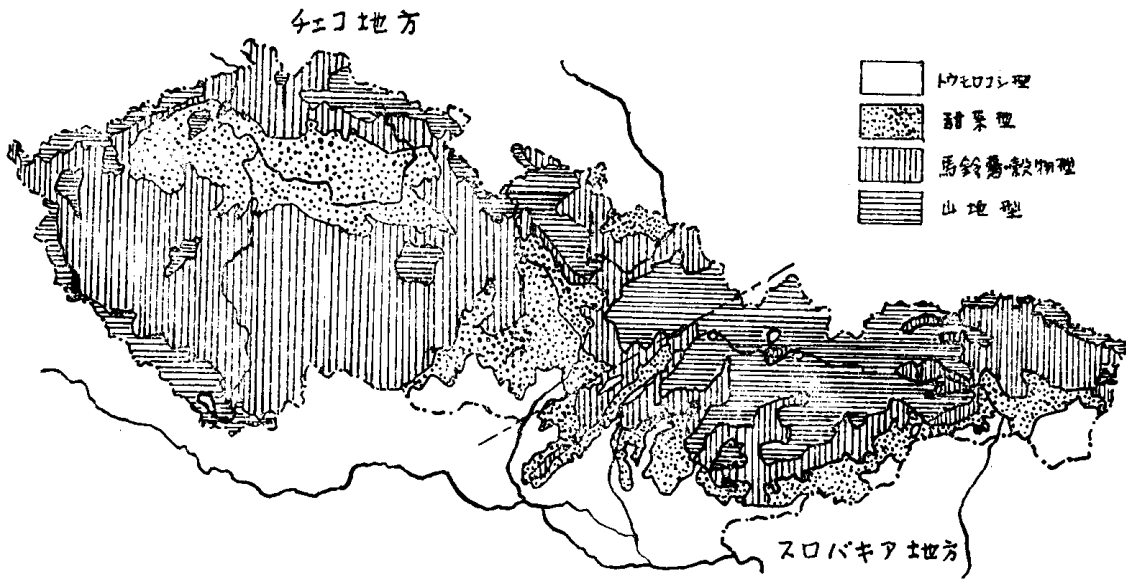
ところで、右の農用地は、改めて説くまでもなく、決して平均的な自然的諸条件をもっているものではなく、地域的に異った諸特徴を持っており、この点からチエコスロバキアにおいては、全国を、その地域の特徴的な農産物に従つて、通常、次の四農業生産地帯に区分している。

即ち、トウモロコシ生産地帯、甜菜生産地帯、馬鈴薯生産地帯及び山地農業地帯がこれである。^(註二)

これをいま図示すれば第一図にみる如くである。

トウモロコシ型の地域は、温暖、乾燥した気候、年平均気温摂氏九度、平均年

第一図 チェコにおける農業生産地帯区分



チェコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

註1. Czechoslovakia, a Handbook of Facts and Figures. 1959. p.86 に拠る。

雨量五〇〇〜五五〇耗の地帯で、トウモロコシの栽培に適した黒土を特徴とし、トウモロコシの外、小麦、野菜、一部は甜菜の栽培にも適しており、総面積の一・二%を占めている。

第二の甜菜型の地域は、概して温暖で、年平均気温八〜九度、平均年雨量約六〇〇耗の地域であって、土壌は小麦、大麦、甜菜その他の工芸作物、例えばチコリー、ホップ等の栽培に適している。又、この地域には、重要な野菜、果実の生育地帯も含まれ、農用地総面積の二・四%を占めている。

次の馬鈴薯型地域は、年平均気温六・五度、平均年雨量約八〇〇耗で、海拔五〇〇〜七五〇米、馬鈴薯、ライ麦、飼料用作物の栽培が基本となっている地帯であって、面積は五〇・六%に及んでいる。

最後の山地型地帯は低温多湿な地域で、その四五%は森林に蔽われており、馬鈴薯、燕麦、ライ麦の栽培に適し、農用地総面積の一六・八%を占めているが、そのうちの五分の一は牧野となっている。

以上の様な農業生産地帯の中に、更に特殊農作物の生産地帯が

散在する。例えば、果樹栽培は、エルベ河沿岸地域及びモラビア中央部に盛んであり、特に葡萄酒生産はスロバキア及び南部モラビア、その他プラハに近いボヘミア中央部及び北ボヘミア等に行われる。

又、家畜生産については、特定な地域というよりは全国的に生産され、特に酪農はチェコ地方、肉牛飼育はスロバキア地方がそれぞれ中心とみられ、家禽生産は工業地帯周辺の小農場において典型的にみられる。^{註三}

チェコ農業は右の特徴的な自然条件によって規定されているわけであるが、歴史的、社会経済的発展の差異が、更にチェコ農業をチェコ地方とスロバキア地方の二つに区分してきたことに注意を払わなければならない。経済的発展の点においてスロバキアは、その資本主義時代において、チェコ地方に比べて八〇年近い遅れを示し、殆んど見るべき工業の発達もなく、未開発農業地帯のままにとどまっていた。例えば一九三七年における工業労働者数は僅かに一〇万人で、就業人口千名につき三一名という状態であった。^{註四}

農業においても、従ってこの遅れた状態は同様であって、大部分が農民であったにもかかわらず、その生産力は著しく低く、チェコ地方と対蹠的な様相を示していた。

革命以後、この状態は急速に改善され、工業における発展は、五カ年計画の終った一九五三年、既に三割五分の生産量の増大、労働者数において約三倍の増大を示す程であって、その後も一貫して著しい発展を示すこととなった。農業生産の伸長もまた、これに劣らず顕著で、現在殆んどチェコ地方の水準に接近しているといえる。

この様な歴史的、社会経済的な発展の地方的差異は、従ってまた、チェコスロバキアの農業発展をみる場合の重要な条件となることは、ここに改めて説くまでもあるまい。

註(一) 第三章及び第四章第三節を参照せよ。

- 註(二) Czechoslovakia, a Handbook of Facts and Figures, 1959, p. 84 参照。
 註(三) 第四章第三節参照。
 註(四) People, Work, Trade Unions in Czechoslovakia. 1959. pp. 78~79 参照。

三 チェコスロバキアにおける農業生産の現状

前章で述べた如き条件の上になつて、しからば、チェコスロバキアにおける農業生産の実態はどうか。以下、若干の統計資料に従つて、これをみてみよう。

第3表 年次別・地方別農業粗生産指数

	1936	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
共和国	総生産 100.0	54.8	83.5	87.3	88.3	84.5	87.5	85.6	95.1	97.4	96.8	99.4
	植物生産 100.0	79.6	84.3	82.2	85.8	76.2	92.4	83.0	93.5	92.8	89.2	93.4
	動物生産 100.0	68.1	82.5	94.3	91.9	96.1	80.5	89.1	97.4	103.8	107.4	107.7
チェコ地方	総生産 100.0	68.7	76.6	82.7	80.7	78.2	79.1	78.3	86.7	89.8	86.3	89.2
	植物生産 100.0	72.4	76.2	79.3	76.6	71.4	84.1	77.8	86.8	88.6	79.9	86.3
	動物生産 100.0	63.9	77.1	87.1	85.9	87.1	72.7	78.8	86.6	91.5	94.4	93.0
スロバキア地方	総生産 100.0	94.7	106.2	102.1	113.4	104.9	114.6	109.2	122.7	122.0	131.3	132.6
	植物生産 100.0	100.2	107.2	90.5	112.0	90.1	116.2	97.7	112.8	105.0	115.9	113.7
	動物生産 100.0	84.7	104.2	123.3	115.8	131.8	111.7	130.1	140.6	152.9	159.4	166.9

註 1. Statistická Ročenka 1959. pp. 219~222. より作成。

2. 1936 年生産を 100 とする指数を示す。

先づ最初に、農業生産を総生産と、植物生産、動物生産に大別して、これを年次別、地方別に検討してみる。

第3表は、戦前一九三六年を一〇〇とした粗生産の推移を示したものである。これによると、共和国全体としては、一九五四年までは、戦前水準を一五%前後割っており、五五年以降急速に回復の方向に向っていることが示されている。この様な停滞は、一般的にいつて、戦中から戦後初期の段階にかけての、戦争による破壊と、戦後社会主義的再編成過程の進行に伴う一時的停滞によって、ひき起されたとみるべく、従って、資本主義諸国にみる如き、農業危機、恐慌による低落とは、全く異質的なものといわなければならない。寧ろ、そうでなくて、極めて短期間の間に、戦争による生産力の破壊を回復し、多くの困難を伴う、農業の社会主義的編成を、基本的に完遂したことを物語っているとみななければなるまい。

植物生産と動物生産を対比してみると、植物生産の回復が稍々おこなわれているのに対して、動物生産の回復は早く既に一九五六年から戦前水準を突破している。

更に、これを地方的にみると、チェコ地方と、スロバキア地方とでかなりの差異のあることに気がつくであろう。戦前、既に高い生産力を持っていたチェコ地方において、戦争による破壊の影響が著しかったことは、人民共和国として、漸く社会主義への建設が緒についた一九四八年には、総合指数において三二%、動物生産において三六%の激減をみており、その回復には長い期間を要している。これに対し、スロバキア地方は、戦前生産力が低かったせいもあるが、建設のテンポは著しく、一九四九年には早くも総体として戦前水準を超え、今日では、動物生産においても一一四という指数を示している。

ところで、この様な生産力の展開過程について、動物生産と植物生産とを対比的に跡づけてみると、第4表にみ

第4表 年次別・地方別にみた総粗生産中の動植物生産比

	1936	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
共和国	植物生産 58.3	植物生産 62.0	植物生産 58.8	植物生産 54.9	植物生産 56.6	植物生産 52.6	植物生産 61.6	植物生産 56.6	植物生産 57.3	植物生産 55.6	植物生産 53.7	植物生産 54.8
	動物生産 41.7	動物生産 38.0	動物生産 41.2	動物生産 45.1	動物生産 43.4	動物生産 47.4	動物生産 38.4	動物生産 43.4	動物生産 42.7	動物生産 44.4	動物生産 46.3	動物生産 45.2
地方	植物生産 56.4	植物生産 59.4	植物生産 56.1	植物生産 54.1	植物生産 53.6	植物生産 51.5	植物生産 60.0	植物生産 56.1	植物生産 56.5	植物生産 55.6	植物生産 52.3	植物生産 54.6
スロバキヤ地方	植物生産 64.5	植物生産 68.2	植物生産 65.1	植物生産 57.1	植物生産 63.7	植物生産 55.4	植物生産 65.4	植物生産 57.7	植物生産 59.3	植物生産 55.5	植物生産 56.9	植物生産 55.3
	動物生産 35.5	動物生産 31.8	動物生産 34.9	動物生産 42.9	動物生産 36.3	動物生産 44.6	動物生産 34.6	動物生産 42.3	動物生産 40.7	動物生産 44.5	動物生産 43.1	動物生産 44.7

註 1. Statistická Ročenka 1959. pp. 219~221 により作成。

2. 各年次の総粗生産物を100とした割合を示す。

る如くなる。これによってみると、植物生産と動物生産との、総生産の中で占める比率は、戦前において、五八対四二、ほぼ六対四の関係にあったわけであるが、人民共和国になって以後も、総生産の中で両者の占める割合は、もちろん年次によって多少の変化はあるにしても、それ程戦前と大きな差異はないと言ってよいであろう。ただ傾向としては、スロバキヤ地方において、植物生産に対し、動物生産の伸びが大きいことがうかがえるが、第3表における動物生産の一六七という指数の伸びは、この点と併せ考えられなければならない。

粗生産指数の展開過程は以上の如く、戦前に比して、ほぼその超克の方向をみせたわけであるが、これを市場向

第5表 地方別・年次別市場向生産指数

	1936	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
共和国	総生産 100.0	69.3	79.2	98.5	98.2	99.7	105.5	97.5	105.3	110.7	114.8	123.3
	植物生産 100.0	95.0	95.1	106.3	105.8	100.4	117.5	104.4	109.9	106.7	107.7	126.5
	動物生産 100.0	52.3	68.7	93.3	93.1	99.2	97.5	93.0	102.2	113.3	119.9	121.3
土地	総生産 100.0	66.8	73.2	91.7	89.9	91.0	94.3	86.9	90.8	97.8	99.4	106.7
コ方	植物生産 100.0	91.2	88.8	106.0	98.2	94.8	109.5	98.8	98.2	99.8	95.2	115.7
	動物生産 100.0	52.2	63.8	83.2	85.0	88.7	85.1	79.7	86.3	96.6	101.9	101.3
スロバキア	総生産 100.0	80.8	106.4	128.8	135.2	138.6	155.8	145.2	170.3	168.4	183.7	198.0
	植物生産 100.0	107.7	115.8	107.0	131.1	118.7	143.9	122.7	148.3	129.2	145.9	161.9
	動物生産 100.0	52.8	96.7	151.3	139.5	159.2	168.3	168.6	193.1	209.0	222.8	235.3

註 1. Statistická Ročenka. 1959. pp. 219~221. により作成。
 2. 1936年市場向生産を100とした指数。

生産という観点から考察してみると、その変化の方向が更に明らかとなってくる。第5表は一九三六年の市場向生産を一〇〇とした指数の年次別、地方別変化を、総生産と植物生産、動物生産についてみたものである。粗生産指数の回復は、前述の如く一九五五年前後から基調的に発展の方向をみせていたわけであるが、粗生産中、市場向生産の占める位置は、これとはかなり異った傾向を示していることが分るのである。一般的にいつて、市場向生産部の戦前水準の超克は粗生産指数の伸びよりも早く、共和国全体では、一九五〇年が転換期になっているといつてよく、地方的にはスロバキア地方において著しく早く、植物生産については一九四八年一〇八、動物生産について

は、一九五〇年既に一五一と劃期的な発展を示している。粗生産指数の回復のおくれているチェコ地方についても、市場向生産指数は、粗生産指数をほぼ二〇%は上廻っており、社会主義計画生産の方向を示しているといつてよいであろう。特にスロバキア地方の動物生産指数の伸びは著しく、一九五八年には、ほぼ戦前の二倍半の市場向生産の伸びを示していることが注目される。

ところで、これら市場向生産が、各年次における生産額中どの位の比率を占めているかを示したものが、第6表である。これによると、共和国全体としては、総生産において戦前三八・七%から、一九五八年の四八%へ、植物

第6表 総生産・動植物生産中の市場向生産比率

	1936	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	
共和国	総生産中 植物生産中 動物生産中	38.7 26.5 55.7	35.8 31.6 42.8	36.7 29.8 46.4	43.6 34.2 55.2	43.0 32.6 56.5	45.6 34.8 57.6	46.6 33.6 67.5	44.1 33.3 58.2	42.8 31.1 58.5	43.9 30.4 60.9	45.8 31.7 62.2	48.0 35.8 62.7
チエコ地方	総生産中 植物生産中 動物生産中	41.3 27.4 59.3	40.1 34.5 48.4	39.4 31.9 49.1	45.8 36.6 56.6	46.0 35.1 58.6	48.0 36.4 60.3	49.2 35.7 69.4	45.8 34.8 60.0	43.2 31.0 59.1	45.0 30.9 62.6	47.6 32.6 63.9	49.4 36.7 64.6
スロバキア地方	総生産中 植物生産中 動物生産中	30.1 23.7 41.6	25.6 25.5 25.9	30.1 25.6 38.6	37.9 28.1 51.0	35.9 27.8 50.1	39.7 31.3 50.2	40.9 29.4 62.6	40.0 29.8 53.8	41.7 31.2 57.1	41.5 29.2 56.8	42.0 29.9 58.1	44.9 33.8 58.6

註 1. Statistická Ročenka 1959. pp. 219~221. により作成。

2. 総生産，植物生産，動物生産の各々の総量中，市場向け部分の比率を示す。

生産において二六・五%から三五・八%へ、また動物生産において、五五・七%から六二・七%へと、いずれも市場向生産部分が一〇%前後増加していることが示されている。地方別には、チェコ地方の先進性がよく示され、スロバキア地方に対して、市場向生産がつねに優先していることがわかる。しかし乍ら、遅れたスロバキア地方においても、既に、戦前の共和国全体の市場向生産割合を、いずれの点においても超え、戦前チェコ水準をも亦、破っている基調に注目すべきである。

次に、市場に出荷される生産物中の動植物比をみると、第7表に示す如くである。これによると、共和国全

第7表 市場向生産中に占める動植物生産比率

	1936	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
共和国	植物生産 39.9	植物生産 54.7	植物生産 47.9	植物生産 43.0	植物生産 43.0	植物生産 40.2	植物生産 44.4	植物生産 42.7	植物生産 41.6	植物生産 38.4	植物生産 37.2	植物生産 40.9
動物生産	60.1	45.3	52.1	57.0	57.0	59.8	55.6	57.3	58.4	61.6	62.8	59.1
チエコ地方	植物生産 37.4	植物生産 51.1	植物生産 45.4	植物生産 43.3	植物生産 40.9	植物生産 39.0	植物生産 43.5	植物生産 42.6	植物生産 40.5	植物生産 38.2	植物生産 35.9	植物生産 40.6
動物生産	62.6	48.9	54.6	56.7	59.1	61.0	56.5	57.4	59.5	61.8	64.1	59.4
スロバキア地方	植物生産 50.9	植物生産 67.9	植物生産 55.4	植物生産 42.3	植物生産 49.4	植物生産 43.6	植物生産 47.0	植物生産 43.0	植物生産 44.3	植物生産 39.1	植物生産 40.5	植物生産 41.6
動物生産	49.1	32.1	44.6	57.7	50.6	56.4	53.0	57.0	55.7	60.9	59.5	58.4

註 1. Statistická Ročenka 1959. PP. 219~221. により作成。

2. 市場向生産総量を100とした動植物生産比を示す。

第 8 表 一ヘクター当たり農業粗生産指数

	1936	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
共和国	総生産物 100.0	78.3	88.1	92.4	93.2	89.4	94.2	93.2	102.0	103.8	103.6	105.9
	植物生産 100.0	83.3	88.9	87.0	90.6	80.6	99.6	90.4	100.3	98.9	95.5	99.5
	動物生産 100.0	71.3	87.0	99.8	97.0	101.6	86.7	97.1	104.4	110.5	115.0	114.8
チ地	総生産物 100.0	73.7	83.0	90.4	88.1	85.2	87.2	87.0	95.2	98.5	95.0	98.0
ェ	植物生産 100.0	77.6	82.6	86.7	83.7	77.7	92.6	86.5	95.3	97.1	88.0	94.8
コ方	動物生産 100.0	68.6	83.5	95.2	93.8	94.9	80.1	87.6	95.1	100.3	104.0	102.1
スロバキア地方	総生産物 100.0	94.9	106.9	102.2	112.8	105.5	118.8	115.1	126.1	123.8	133.9	133.9
	植物生産 100.0	100.4	108.0	90.6	111.5	90.6	120.5	103.0	116.0	106.5	118.1	114.9
	動物生産 100.0	84.9	104.8	123.3	115.2	132.4	115.8	137.0	144.4	155.1	162.4	168.5

註 1. Statistická Ročnka 1959. PP. 219~221. により作成。

2. 1936年の1ヘクター当り生産を100とした指数。

体としては、市場向に生産された生産物中の動植物比は、戦前において、植物生産が三九・九%、動物生産が六〇・一%であるのに対し、一九五八年では、植物生産が四〇・九%、動物生産が五九・一%であって、殆んど両者の間に著しい差違はないといえよう。ただ、地方的にみると、この構成比はチェコ地方と、スロバキア地方とでは、逆の変動傾向を示しており、チェコ地方では植物生産部分の比率が若干増大的であるのに対し、スロバキア地方では、逆に動物生産部分が比較的顕著に増大していることが示されている。

以上の点を概括して全体的にいうならば、人民民主主義共和国として、社会主義建設途上のチェコスロバキアの

農業生産は、戦争による破壊的影響を、ほぼ一九四八年からの一〇年間に超克して、社会主義大規模農業への編成替えを、大きな破綻なしに完遂していることを示しているといつてよいであろう。

そこで、これらの点を、更に土地生産力と労働生産性の発展という観点から概観してみよう。第8表は、先ず一ヘクタール当り農業生産指数の変化を示したものである。戦前一九三六年を一〇〇とすると、土地生産力の戦時的荒廃は、否み難く顕著であり、主要農業生産地帯であるチェコ地方の回復のおくれが、共和国全体の指数の伸びを制していることに、一見して気がつくであろう。これに対し、後進地帯であったスロバキアの一ヘクタール当り生産力の発展は眼覚ましい。

しかし乍ら、一ヘクタール当り生産力の発展は、真の意味での生産力の発展を必ずしも表現するものではなく、戦前、既に高い水準にあったチェコ地方において、戦前水準を超えていないことが、そのまま、チェコ地方の農業発展の戦後における停滞を物語るかの如く理解してはならない。このことは、更に労働生産性の変化を検証することによって、初めて明らかとなる。第9表は、農業常時従事者一人当り粗生産指数の変動を示すものである。

ここにおいて、我々は、チェコスロバキア農業生産の内部に起った、この十数年間の真の変化を、如実にみせられることとなる。共和国全体においても、またチェコ地方、スロバキア地方のいずれにおいても、労働生産性は、約この十年間において、植物生産で戦前水準の七割乃至九割の増加、動物生産で二倍乃至二倍半に及んでいるのである。この事實は、戦前の寄生地主制から、この十年間における社会主義大規模農業への編成替えという、チェコスロバキア農業の構造的変革の成果を示すものに他ならないであろう。換言すれば、チェコスロバキアにおける農業生産力発展の主要な方向は、単なる農業生産総量における戦前水準の超克、土地生産力の発展ということよりは

第9表 農業常時従事者1人当り粗生産指数

	1936	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
共和国	総生産物 100.0	109.0	126.8	142.6	156.9	162.5	172.1	159.4	168.8	174.5	180.7	193.0
	植物生産物 100.0	115.9	128.0	134.3	152.4	146.6	182.0	154.7	166.0	166.4	166.6	181.4
	動物生産物 100.0	99.2	125.2	154.0	163.2	184.7	158.4	166.0	172.8	186.0	200.5	209.2
土地	総生産物 100.0	113.5	135.3	159.5	165.7	169.7	175.0	167.0	178.3	188.6	188.8	200.5
地方	植物生産物 100.0	119.6	134.6	153.0	157.4	154.8	186.0	166.1	178.4	185.9	174.9	193.9
地方	動物生産物 100.0	105.6	136.1	167.9	176.5	189.0	160.7	168.2	178.1	192.0	206.7	208.9
地方	総生産物 100.0	110.6	124.7	126.4	156.9	163.1	183.4	161.0	169.1	167.5	187.4	200.4
	植物生産物 100.0	117.0	125.9	112.0	155.1	140.1	185.9	144.0	155.5	144.1	165.4	171.9
	動物生産物 100.0	99.0	127.4	152.6	160.3	204.9	178.7	191.8	193.9	209.9	227.4	252.3

註1. Statistická Ročenka 1959. PP. 219~221. より作成。

2. 1936年を100とした指数。

異った次元においてそれを達成するための基礎構築、それは、後にみる如く、社会主義大規模農業への編成替えという点に指向されて来たことを物語るものに他ならない。そして、この点においては、労働生産性指数の伸びは、編成替えの当初からの成功を、端的に示しているといつてよいであろう。

ところで、それでは、チェコスロバキアにおいては、実際に、どの様な作物が、どの位栽培され、どれ程の収穫をあげているのであろうか。この点を明らかにするために、若干の指標を示しておこう。

先ず第10表は、作付総面積と主要作物についての作付面積を、年次別、地方別に示したものである。これによ

第10表 作物種類別作付面積

		1934~38		1949~53		1955	1956	1957	1958
		平均	平均	平均	平均				
作付総面積	総数	5,613,476	5,121,353	5,104,603	5,143,260	5,113,246	5,117,985		
	チエコ地方 スロバキア地方	3,846,592 1,766,884	3,400,361 1,720,992	3,378,478 1,726,125	3,391,359 1,751,901	3,368,491 1,744,755	3,369,381 1,748,604		
穀類	総数	3,504,148	2,799,688	2,691,503	2,733,535	2,735,880	2,689,248		
	チエコ地方 スロバキア地方	2,322,236 1,181,912	1,740,445 1,059,243	1,693,498 998,005	1,709,649 1,023,886	1,706,095 1,029,785	1,680,803 1,008,445		
工業作物	総数	229,080	369,473	374,242	373,468	370,800	383,604		
	チエコ地方 スロバキア地方	175,992 53,088	272,695 94,778	269,848 104,394	270,424 103,044	269,111 101,689	275,130 108,474		
馬鈴薯	総数	714,769	639,891	620,716	630,040	628,502	607,237		
	チエコ地方 スロバキア地方	499,068 215,701	451,459 188,432	437,193 183,523	442,879 187,161	440,964 187,538	422,445 184,792		
飼料用作物	総数	1,053,967	1,227,414	1,327,190	1,310,035	1,280,529	1,348,191		
	チエコ地方 スロバキア地方	796,818 257,149	879,287 348,127	917,154 410,036	902,783 407,252	883,879 396,650	929,433 418,758		
蔬菜類	総数	39,729	41,798	43,322	41,966	40,859	42,898		
	チエコ地方 スロバキア地方	23,216 16,513	25,337 16,461	25,300 18,022	22,927 19,039	22,601 18,258	23,794 19,104		

註 1. Statistická Ročenka P. 229. より作成。 2. 単位はヘクタール。

ると、一九五八年、チェコスロバキアの主要作物作付総面積は五一万八千ヘクタール、そのうちチェコ地方が三六万九千ヘクタール、スロバキア地方が一七四万九千ヘクタールとなっており、戦前に比して、約五〇万ヘクタールの減少を示している。この減少は、主としてチェコ地方における穀菽類の作付面積の減少に負っているといえよう。しかし、人民民主主義共和国としての発足以後をとっていうならば、大きな作付面積の変化はないといつてよい。

作物種類別についてみると、穀菽類が第一で、共和国全体で、一九五八年度、二六八万九千ヘクタール、次いで飼料用作物の一三四万八千ヘクタールとなる。穀菽類が漸減傾向にあるのに反して、飼料用作物の作付は、逆に漸増傾向をみせており、農業部門中の畜産業の発展と、表裏をなすものとみることができよう。

馬鈴薯、蔬菜類については、戦前作付面積とそれ程の差違はなく、馬鈴薯におけるチェコ地方の稍々減少、蔬菜類のスロバキア地方における漸増を指摘できる程度で、前者の作付面積が六〇万七千ヘクタール、後者のそれが四万三千ヘクタールといったところである。

工芸作物の作付面積については、戦前水準と極めて対照的で、チェコ地方において一〇万ヘクタール、スロバキア地方で五万ヘクタールと非常に大巾に増大したことがわかる。

次に、主要作物の一ヘクタール当り収穫量と、それらの総収穫高についてみてみよう。第11表は、これを示したものである。ここで注意をしなければならないことは、一九五八年において、若干の作物のヘクタール当り収穫量註(一)従ってまた総収穫高の減少が眼立つことであるが、これは、同年が著しく天候不良であったことによる。そこで、

このことを考慮に入れて、最近の傾向をみてみると、大麦、トウモロコシ、亜麻、甜菜、馬鈴薯、飼料用根菜類、飼

第11表 作物種類別1ヘクタール当り収穫量並びに総収穫高

	1ヘクタール当り収穫量					総 収 穫 高				
	1949	1955	1956	1957	1958	1949	1955	1956	1957	1958
小麦	19.5	20.4	21.3	20.6	18.3	1,556	1,473	1,541	1,525	1,346
ライ麦	18.6	18.9	20.4	18.3	19.0	1,316	968	1,050	948	937
大麦	17.9	20.1	21.1	20.4	17.9	1,023	1,291	1,408	1,362	1,199
燕麥	16.9	18.5	19.2	16.8	17.4	1,062	974	1,034	899	871
トウモロコシ	18.7	24.4	21.8	26.5	27.3	240	391	399	445	479
大豆	14.4	12.1	12.1	8.7	9.8	33	34	29	44	18
菜シ	11.0	13.1	14.6	11.8	12.4	18	43	48	39	48
種け	6.5	5.3	5.2	4.6	5.0	11	8	8	6	5
亜麻	19.7	26.2	26.4	18.7	23.6	58	141	143	100	129
甜菜	220.4	285.1	206.7	298.3	299.1	4,283	6,152	4,585	6,775	6,946
馬鈴薯	101.5	127.3	152.9	139.4	109.1	5,772	7,905	9,635	8,756	6,589
飼料用根菜類	245.6	344.8	254.3	330.0	331.6	3,551	4,210	3,043	3,572	3,204
飼料用草類	41.2	49.3	46.4	41.5	46.5	4,786	5,693	5,257	4,759	5,712
牧草	31.9	36.4	35.8	31.9	34.8	3,678	3,980	3,969	3,464	3,746

註 1. Statistická Ročenka 1959. P. 233, P. 236 より作成。

2. 1ヘクタール当り収穫量はクオーターで示す。

3. 総収穫高は1,000 トン単位で示す。

4. 共和国総数を示す。

料用草類等は、いづれも1ヘクタール当り収穫量が增大しており、大豆、種けし等が戦前を下廻っているが、総体

第12表 家畜飼養頭羽数

	馬	牛		豚		羊	雞	
		総数	牝牛	総数	6ヶ月以上の牝豚		総数	牝雞
1949	628	3,663	1,871	3,242	426	459	16,393	13,737
1955	543	4,041	2,096	4,771	549	1,017	22,540	19,397
1956	543	4,107	2,084	5,285	531	1,000	23,367	20,365
1957	542	4,134	2,071	5,369	522	956	23,876	21,018
1958	517	4,091	2,066	5,435	495	889	24,250	21,515
1959	456	4,183	2,080	5,283	555	817	25,364	22,517

註 1. Statistická Ročenka 1959. p. 245 より作成。
 2. 共和国総数のみを示す。

チエコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

二二二

として、改善されつつあることがみられよう。しかし、この点は、前述の如く、労働生産性の上昇と併せ考えなければ不十分である。

総収穫高については、一ヘクタール当り収量と、更に作付面積が関係してくるわけで、大麦、トウモロコシ、アブラ菜、亜麻、甜菜、馬鈴薯、飼料用草類の増加が眼立ち、ライ麦、燕麦、莢豆、種けし等の減少が指摘できる。

次に畜産物については、第12表が、これを示す。馬を除いては、いずれも戦前頭数を大きく離しており、畜産の面における発展を如実に物語っているといえよう。

最後に、この様なチエコスロバキアにおける農業生産の発展を、国際的に位置づけてみるために、ヨーロッパ諸国との単位当り生産量についての比較を試みよう。

第13表は、土地生産力の側面からの、一応の生産力水準の位置づけを示すものである。

表によると、凡ての生産の点で、極めて集約度の高いデンマーク及びベルギーは別として、その他の八カ国との対比では、チエコスロバキアは、牛において、ドイツ連邦共和国に次いで第二位、豚はオーストリアに次い

第13表 ヨーロッパ各国との単位当り生産量比較

	牛	豚	小麦	ライ麦	大麦	燕麦	馬鈴薯
チェコスロバキア	56.6	105.4	20.6	18.3	20.4	16.8	139
オーストリア	56.9	154.0	22.2	19.0	22.7	18.5	224
ベルギー	143.6	140.8	35.8	28.8	34.4	30.7	249
デンマーク	102.8	195.7	42.7	27.0	37.0	33.3	202
フランス	51.2	36.4	23.7	13.2	22.2	16.0	153
ドイツ民主共和国	51.6	164.8	30.0	20.3	27.9	21.9	179
ドイツ連邦共和国	81.9	168.0	31.5	26.0	28.7	24.6	235
イタリア	40.5	23.7	17.3	12.9	12.9	13.8	82
ポーランド	40.5	77.5	16.1	14.7	15.8	14.6	127
スウェーデン	55.5	50.0	21.4	20.0	21.2	16.4	126

- 註 1) 牛及豚は農地(牛)及耕地(豚)100ha. 当り生産価額(クローネ)比較を示す。
 2) 小麦以下については1ha. 当りの収穫量(単位100kg)の比較を示す。
 3) 年度は1959年度。
 4) S.F ドフスキー著. 岡田勝定訳前掲書. P. 37 に拠る。

で四位、小麦はスウェーデンについて五位、ライ麦はオーストリアに次いで五位、大麦はスウェーデンに次いで六位、燕麦はオーストリアに次いで四位、馬鈴薯はフランスに次いで五位となっており、イタリア、フランスを凌駕して、ほぼスウェーデン水準にあるといえることができる。

もちろん、資本主義的農業生産と、社会主義的農業生産とを、単純に、その単位当り生産量について比較したものであり、労働生産性の発展を除いているという点においても不完全なものであるといわなければならないが、これらの点を考察し、今後のチェコスロバキアにおける農業生産力の発展を考えるについては、次に、その社会主義的生産諸組織の問題を明らかにすることが、是非とも必要となつてこざるを得ないであろう。

註(一) S・ドフスキー、前掲書三八頁参照。

第14表 農業経営組織別構成

	共和国		チェコ地方		スロバキア地方	
	数	農地面積	数	農地面積	数	農地面積
国営諸施設	27,887	1,346,527	24,014	997,844	3,873	348,683
J Z D	12,187	4,020,591	9,782	2,644,545	2,405	1,376,046
JZD組合員 附帯地経営	630,386	314,134	390,589	196,774	239,797	117,360
個人農場	947,091	1,619,728	575,239	696,529	371,852	923,199
2ha.以下	741,680	393,836	494,589	222,757	247,091	171,079
2.00～5.00	120,167	399,733	43,640	145,275	76,527	254,458
5.00～10.00	65,091	454,689	26,344	187,818	38,747	266,871
10.00～15.00	14,193	170,916	8,744	106,508	5,449	64,408
15.00ha.以上	2,896	52,123	1,922	34,171	974	17,952
Copy holder その他	3,064	140,353	—	—	3,064	140,353

チェコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

二二四

註 1) 1958. 12. 31 現在における統計。
 2) Statistická ročenka Republiky Československé 1959. P. 227 に拠る。
 3) 面積の単位はヘクタール。

四 チェコスロバキア農業における 社会主義生産組織

農業生産を規定する基本的な条件は、いうまでもなく、その経営組織であり、生産手段である。

今日チェコ農業の発展を規定するところの経営組織は、統一農業生産協同組合 Jednotná Zemědělská družstva (JZD) を基幹として、国営企業 Státní statky, 機械・トラクター・ステーション Strojni a traktorové stanice からなっているといえよう。

(1) 統一農業生産協同組合 JZD。

先ず農業生産協同組合についてこれをみると、今日、農村の約八〇%以上に設立されており、その数は一万二千を超える農業生産における基本形態として、チェコ農業生産力発展の根幹をなしていることはいうまでもない。

チェコ農業全体における経営形態別構成を今、一九五八年十二月三十一日現在についてみると、第14表に示す如くであ

る。

即ち、共和国全体で農業生産協同組合の数は一二、一八七組合に及び、その支配面積は四、〇二〇、五九一ヘクタール、全農地の約五五％であることをみれば、その決定的意義を知ることができるであろう。

これを地方別にみると、チェコ地方は、組合数九、七八二、面積二、六四四、五四五ヘクタール、チェコ地方総農用地四六一万二千ヘクタールの約五八％となり、スロバキア地方については、組合数二、四〇五、面積一、三七六、〇四六ヘクタールで、スロバキア地方二七二万四千ヘクタールの約五一％に及び、チェコ地方の協同化が稍進んでいるが、いずれにしても、農業生産協同組合がチェコ農業における社会主義形態の基幹部分を構成していることは明らかである。

更にこれを生産力の点からみてみるならば、一九五八年度において、全農業生産物を一〇〇とするならば、社会主義的経営の生産物は五四・二％、そのうちJZD III及IV型の生産物が四〇・五％を占め、市場向生産物については、社会主義的経営の生産物が全体の六三・二％に及び、そのうち四四・八％がJZD III及IV型によって生産されている。^{註一)} いずれの視点からしても、統一農業生産協同組合が、今日のチェコ農業を支える基礎となっていることは疑いないところである。

(2) 国 営 企 業 *Státní statky*

農業生産協同組合の組織、機能、その役割等については次章において更にくわしく検討することとして、次に国営諸施設、特に国営農場についてみよう。第14表に示される如く、国営諸施設は、共和国全体で二七、八八七カ所その支配下にある農地面積一、三四六、五二七ヘクタールに及び、総農地面積の約一八％個人農場の総面積より三

第15表 国营農場に関する諸指標

	共和国			チエコ地方			スロバキヤ地方		
	1956	1957	1958	1956	1957	1958	1956	1957	1958
企業数	182	163	164	142	123	124	40	40	40
部門数	1,042	1,028	1,081	766	747	813	283	281	268
農場数	2,895	3,038	3,062	2,308	2,463	2,469	587	575	593
農用地面積	900	942	985	693	730	764	207	212	221
農用地面積%	12	13	14	15	16	17	8	8	8
耕地面積	660	694	735	498	529	563	162	165	172
耕地面積%	13	14	14	15	16	17	9	10	10
労働者総数	185,169	177,079	183,111	135,062	128,055	135,920	50,107	49,024	47,191
常勤労働者	145,045	140,011	143,391	103,991	100,281	104,688	41,054	39,730	38,703
労働隊	8,599	6,967	9,358	7,063	5,896	8,196	1,536	1,071	1,162
季節労働者	13,169	12,556	12,808	9,971	8,699	9,761	3,198	3,857	3,042
機械技術者	10,111	9,734	9,753	7,595	7,204	7,289	2,516	2,530	2,464
経営管理者	4,844	4,695	4,705	3,774	3,556	3,556	1,110	1,107	1,149

註 1) 農用地面積%, 耕地面積%は夫々, 全農用地面積, 全耕地面積に対する%。

2) Statistická Ročenka Republiky Československé 1959. P. 261 に拠る。

○万ヘクタール少いだけである。地方的には、圧倒的にチェコ地方に多く、施設数において二四、〇一四、約八六%が集中し、面積も九九七、八四四ヘクタール、総国営農地面積の七四%がチェコ地方にある。これらの事情は、多くの国営諸施設が、革命前の共和制時代既に国有化されていた諸施設を引継いだものであるといわれる如く、第二章でのべた如き両地方の革命前における社会経済的発展の差異によるものと思われる。

いま、国営諸施設のうち、その基幹をなす国営農場の構成についてみると、第15表に示す如くである。

国営農場は、通常、計画立案、総合的管理を行なう本部 *Státních statků* (表では企業数として示してある) を中心として、いくつかの部門 *Oddelení státních statků* に分けられており、夫々の部門がまたいくつかの農場 *farem* を経営する、という風に構成されている。一例をあげれば、一九五九年初冬、私が視察したスロバキアの首都ブラティスラワ *Bratislava* 北西二五軒にあるセネツ *Senec* 国営農場は次の如く構成されている。

Directorate がセネツにあり、その下に八部門が区分される。即ち、五つの農業生産部、各々一つづつの建設部、農業機械部、倉庫部がそれぞれである。農場はそれぞれの農業生産部に所属し、総計一九農場から成り、農場の中にはいくつかの村落が包摂されている。セネツのセンターには管理者が三一名居り、これらの人が各部門の経営管理を担当する。その他に各部門を含めて五八名の機械技術者がおり、そのうちの二名が部門の責任者となって、部門毎の運営管理を行なう。また建設部には一一〇名の建設関係者が所属し、国営農場の全建設計画を遂行することになっている。更に農業機械部には七〇名の機械工が所属し、農業機械の管理修繕等に当るのである。

農業生産に直接従事する農業労働者は一、二六〇名で、農用地五、六〇〇ヘクタール、耕地四、八〇〇ヘクタールの農場総面積の上で、肉牛三、三〇〇頭、乳牛一、四五〇頭、豚七、八〇〇頭、家禽一〇、〇〇〇羽、役馬二〇

○頭、種牛四二頭を飼育管理し、四、八〇〇ヘクタールの耕地の約三〇％に青刈飼料及びHayを、約三七％に工業作物、例えば甜菜、油料作物、煙草、麻等を、残りの三三％に、トウモロコシ、小麦、ビール麦等を栽培している。使用している主要な農業機械は重トラクター一二台、普通トラクター五五台、貨物車五台、ミルク運搬車二台、スチーム耕耘機八台(ディーゼルに変換中)、収穫コンバイン九台、トウモロコシ・コンバイン三台、甜菜コンバイン一台、野菜・煙草播種コンバイン四台である。

このセネツ国营農場の構成から、チェコにおける国营農場の輪画はほぼ推察されるであろうが、一農場当りの規模は概して非常に大きく、今、第15表からその概数を算出すると次の如くなる。

部門数	六・六
農場数	一八・七
農用地面積	六、〇〇〇ヘクタール
耕地面積	四、四八〇ヘクタール
労働者数	一、一二〇名

同表及び第14表から明らかな如く、国营農場も亦、圧倒的にチェコ地方に集中しており、総数一六四農場のうちチェコ地方に一二四、スロバキアにはわづか四〇農場であって、一九五六年以来スロバキア地方では農場数に増減はなく、一農場当りの面積の増大をみているが、チェコ地方ではこの間に一八農場の減少と農用地面積において七万一千ヘクタールの増大がみられ、国营農場の集中が進んでいることが分る。

セネツの例からも分る様に、国营農場の経営は総じて近代化、機械化農業の先端を示すものとして、絶えず新農

業機械の採用、新技術の導入、労働過程の合理化に注意が払われ、農業科学アカデミー、国立農業機械試験場、農事試験場等との密接な連繋の下に運営がなされている。

もちろん、社会主義大規模農業経営の運営上の特徴は、右の如き、農場管理組織、技術組成、関連部門との有機的連関、その総合的な計画性にみられるところであるが、これらの全構成の基礎をなし、農場の円滑な総合的運営の骨格を形成している農業労働組合並びにチェコスロバキア共産党組織の機能を抜きにしては、到底その真の姿を理解し得るものではない。国营農場に働くものは、季節労働者を含めて、凡て農業労働者組合に所属する。この組合は各部門毎に組織され、執行委員会をもち、全チェコ農林労働組合の地方評議会を通して中央に接触しており、農場内部では、各部門に所属する農場に分会を組織している。組合の主要な任務は、組合員の利益を代表し、農場の全生産計画の成功的な遂行を援助することにある。このために、組合は生産競争を組織したり、組合員の資質を向上させるために各農場に二年制の農業学校 Agricultural Master School を設けて農業基礎教育を授ける外、組合として更に農業専門学校、大学に組合員を奨学生として派遣する。前記セネットでは専門学校へ四二名、大学へ一四名が農場労働者の中から派遣されている。

もちろん、労働組合は、農場労働者の雇傭に関与し、これに対する管理責任者の一方的任免は許されず、組合員は組合の承認なしには雇傭し解雇されることはない。農場の各部門、各農場の経営管理にも、各種委員会に組合代表が参加することによって参加し、最終的な決定は組合の承認なしにはなし得ない。換言すれば、農場運営の凡てが労働者の全責任において遂行される様に構成されているのであって、官僚的な押しつけや、労働者の知らない生産計画というものはないといえよう。

共産党の組織も、ほぼ同じ段階で組織されているが、もちろん凡ての労働者が党員であるのではない。一定の資格認定にもとづいて党員たるの資格を得るのであって、農場最高責任者といえども、必ずしも党員である必要はない。労働組合が、組合の利益を代表して計画の完遂を援助することをもって主要な任務とするのに対し、党は農場及び農業労働者の生活の凡てに亘って配慮しなければならない責任をもつ。特に労働者の社会的政治的資質の向上という点が重視される。

この様に、管理機構、労働組合、党の三者が、民主的に農場の運営に参加することによって、初めてチェコ全体の国営農場の運営が統一的に、計画的に、しかも円滑に推進されることが可能となるのである。

もちろん、国営農場が全農業生産において占める地位は、総合農場のそれに比して小さいことは後に述べる通りであり、一九五八年総生産高において一三・七%、市場向生産において一八・四%であって、JZD III及びIV型の四〇・五%、四四・八%に比すべくもないが、その農業生産の全体的な発展における指導的役割は、極めて重要な地位を占めていること、ここに改めて説くまでもないであろう。

(3) 機械・トラクター・ステーション

次に、第三の国営機械トラクター・ステーション *Strojní a traktorové stanice* についてみてみよう。STSは第16表にみる如く全国で、一九五八年二六〇カ所、うちチェコ地方に一七七カ所、スロバキア地方に八三カ所設けられており、全国の農業地帯をその傘下に蔽っている。その主要な目的は、いうまでもなく、JZD自身では処理しかねる様な農作業の凡てに亘って、これができるだけ安い費用で、高度の熟練技術を提供してやるというところにある。そのため、STSは更にいくつかのJZD毎にトラクター・ブリガード・センター *Středisek traktorových*

第16表 S T S に 関 する 諸 指 標

	共 和 国							チ エ コ ス ロ バ キ ア 地 方							ス ロ バ キ ア 地 方			
	1954	1955	1956	1957	1958	1954	1955	1956	1957	1958	1954	1955	1956	1957	1958			
S T S 総 数	256	256	257	258	260	174	174	175	175	177	82	82	82	83	83			
トラクター・リアクター・セクター数	2,354	2,457	2,566	2,807	2,770	1,579	1,642	1,734	1,905	1,883	775	815	832	902	887			
労働者総数	45,630	52,122	53,739	53,769	53,305	29,050	33,732	34,971	35,303	39,992	16,580	18,390	18,768	18,466	19,313			
運輸関係係数	29,724	33,120	33,635	34,374	38,586	18,716	21,330	21,728	21,655	26,049	11,008	11,790	11,907	11,719	12,537			
機械技術者	7,040	10,034	11,016	10,399	11,302	4,596	6,529	7,220	6,707	7,821	2,444	3,505	3,796	3,692	3,481			
書記	5,568	5,712	5,786	5,770	5,972	3,647	3,800	3,888	3,889	4,054	1,921	1,912	1,898	1,881	1,918			
STS主要農業機械台数	123,774	145,053	155,070	172,398	189,724	85,805	95,967	101,118	114,992	128,067	42,908	49,086	53,952	57,406	61,657			
標準トラクター(牽引力15HP)	21,933	25,011	28,157	32,067	35,473	14,405	16,766	18,681	21,966	24,469	7,528	8,245	9,476	10,071	11,004			
穀物コンバイン	1,453	2,540	3,153	3,130	3,752	928	1,571	1,896	1,863	2,332	525	969	1,257	1,267	1,420			
自動束木機	18,222	15,925	13,827	15,094	17,477	13,442	11,594	9,898	10,650	12,339	4,780	4,331	3,929	4,444	5,138			
打穀機	16,760	15,010	13,023	12,497	10,107	10,562	8,877	7,220	6,508	5,583	6,198	6,133	5,803	5,899	4,524			
打穀機	2,179	2,848	3,282	3,841	5,453	1,660	2,293	2,742	3,190	4,182	519	555	540	741	1,271			
草刈機	8,544	9,764	10,563	12,536	13,511	5,711	6,080	6,568	8,106	9,117	2,833	3,684	3,995	4,340	4,394			
穀物刈取機	11,019	15,581	16,591	18,140	20,264	7,081	9,677	9,556	12,029	13,391	3,938	5,904	7,035	6,120	6,873			
甜菜コンバイン	445	932	1,208	1,246	1,097	338	725	913	932	853	107	207	295	314	244			
並麻コンバイン	161	224	223	224	215	121	169	171	166	155	40	55	52	58	60			
トラクター	24,695	27,455	23,740	31,715	36,335	16,254	18,124	19,826	21,038	23,967	8,441	9,331	9,914	10,677	12,368			
耕転用トラクター	1,430	4,752	7,146	9,841	10,567	959	3,325	4,966	6,427	7,210	471	1,427	2,180	3,404	3,357			

註1) Socialistická Republika Československá 1959. PP. 248~270 より作成

brigád を設け、更に各JZDはその受け入れのためのブリガードを設けるといふ風に、全体が構成されている。一九五八年度ブリガード・センターは全国で二、七七〇カ所、うちチェコ地方一、八八三カ所であるか、全国で一STS当り一〇・七センター、一センターに包摂されるJZDの数は約四・八組合、面積にして約一、四五〇ヘクタールとなる。

STS設置数は、一九五四年以降の五カ年間にしてみると、第16表の如く、僅かに四カ所の増加をみるだけであるが、ブリガード・センターの数は四一六カ所と大きく増加している。この伸びは特にチェコ地方において著しいことが分る。

STSの目的については前述した如くであるが、その具体的な活動、機能については、最近かなり大きな変化がみられ、初期の、農作業全般についての作業援助から、最近では主として重機械による重作業の遂行、各JZDで所有する農業機械の大巾な修理、大規模の病虫害防除、農業土木機械による建設作業等に重点が移行しつつある。これは、各JZDが自力で多種類の農業機械を所有するに至ったことから起ってきた変化であるとみてよいであろう。JZDは、その必要に応じて、STSのもつ農業機械、トラクターその他を、政府の決めた一定の価格で買いとることができるからである。これに対応して、機械、トラクターの運転手はJZDに加入する様になっている。^{註(三)}

STSに働く労働者の中心は、いうまでもなく、トラクター・ドライバーその他運転関係に従事する労働者であって、全国総数三八、五八六名、一STS当り約一四九名、一ブリガードセンター当り、約一四名ということになる。これに対し、機械技術者は総数一一、三〇二名で、運転関係労働者に次いでSTSの基幹部分を占め、一STS当り約四三名、一センター当り約四名である。この技術関係者の中には、土壤試験を行なう技術者や、家畜飼育

の技術者、耕種技術の指導者等も含まれ、JZDの土壤試験を行なう外、家畜の飼育管理、耕種の改善等までを援助していたのであるが、一九五九年下半年期以降、家畜、耕種の指導改善事業については、STSに代って、地方行政委員会が当ることになり、従って、これらの技術関係者は、所属替えが行なわれている。

事務労働者は五、九七二名で、一STS当り約二三名、一センター当り約二・二名となり、現場労働者との比率はSTSにおいて、一対八・四人であり、労働者構成比では、一〇・一%である。このことは、STSにおける組織的整備が簡素化されていること、事務機構の能率化と現場労働中心のSTSの性格とを示しているといえよう。このことは、更に各部門労働者の増加率の上にも現われ、一九五四年を一〇〇とすると一九五八年に於て、運転関係労働者一三〇、技術関係労働者一六一、事務労働者一〇七という数字を示し、とりわけ技術労働者の伸びが著しいことを示している。これに対し、事務労働者数は殆んど固定していることが分る。

地方別には、スロバキア地方に対し、チェコ地方の、労働者数の伸長が眼立っていることを指摘できよう。

次に、STSが所有する農業機械の種類と数量についてみよう。先ず主要農業機械台数の総計について第16表をみると、一九五八年度全国で一八九、七二四台、一STS当り約七二九台、一ブリガード・センター当り六八・五台の割合である。機械化の方向は、今日、トラクターによる作業機牽引、コンバインによる高度化の方向を向いており、その他についても自動化の方向が進められている。最も多いのは各種トラクターで四六、〇四〇台、次いでプラウの三六、三三五台、穀物刈取機二〇、二六四台、自動束禾機一七、四七七台、草刈機一三、五一一台の順となり、コンバインは尚今後の発展に俟つところが大きいといわねばならない。今、機械化の趨勢をみるため、一九五四年を一〇〇とする増加指数をみると第17表の如くであって、全体としてこの五年間に四割七分の増加率を示し

第17表 S T S 農業機械の趨勢

	1954	1955	1956	1957	1958
STS 勢 主要 農業 機械 總数	100	113	121	134	147
標準トラクター(15HP)	100	114	128	147	162
穀物コンバイン	100	175	217	216	258
自動束禾機	100	87	76	83	96
打穀機	100	89	77	74	60
※ 自動式	100	131	156	176	250
草刈機	100	114	124	147	159
穀物刈取機	100	142	151	165	185
甜菜コンバイン	100	210	272	280	248
亜麻コンバイン	100	139	138	139	134
プラウ	100	111	120	128	147
耕耘用トラクター	100	332	500	610	975

註 1) 第16表より作成。

2) 1954年を100とする指数を示す。

チエコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

二三四

ているが、これを機械種類別にみると、種別によってかなり異った動向を示していることが分る。最高の伸長率を示しているのは、耕耘用トラクター *Plečky traktorové* であつて、一九五四年の約十倍近い増加である。次いで穀物コンバイン、甜菜コンバインの増加が約二・五倍、甜菜コンバインは一九五七年の二八〇を最高に若干低下しているが、全体としてコンバイン類の高性能農業機械の伸長が顕著であることは表にみる通りである。これに対して、自動束禾機、打穀機は漸減しており、殊に打穀機は自動式との交替が極めて顕著である。総じてSTSの機械設備が急速に充実されつつあることが示されているといえよう。

扱て、これらのSTSの作業規模はどの様なものであろうか。

第18表は、作業遂行量を面積で示したものである。全国総計では、一九五八年は一九五四年の既に約二倍の作業遂行面積を示しているが、殊にJZDに対するサーピス量が全体の九二・二を占めるに至っていることは、STSとJZDの

第18表 S T S 作業規模

チエコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

	共和国				
	1954	1955	1956	1957	1958
農業機械作業遂行量	7,372.3	8,069.1	9,471.0	11,340.6	13,173.0
その他の運輸作業量	1,275.7	1,763.9	2,513.3	3,045.1	3,817.9
農業用運輸作業	—	461.1	600.7	754.4	1,043.2
総計	8,648.0	9,833.0	11,984.3	14,385.7	16,990.9
(1954年を100とする指数)	100	114	139	166	197
農業機械作業全量中 J Z D の作業に 向けられた割合%	75.4	74.7	80.8	86.9	92.2
	チエコ地方				
	1954	1955	1956	1957	1958
農業機械作業遂行量	4,554.0	4,973.6	6,040.0	7,517.0	9,074.0
その他の運輸作業量	768.9	1,108.1	1,659.0	2,051.3	2,615.9
農業用運輸作業	—	266.1	290.9	380.8	549.5
総計	5,322.9	6,081.7	7,699.0	9,568.3	11,689.9
(1954年を100とする指数)	100	115	145	180	220
農業機械作業全量中 J Z D の作業に 向けられた割合%	74.6	73.3	80.9	87.7	92.4
	スロバキア地方				
	1954	1955	1956	1957	1958
農業機械作業遂行量	2,818.3	3,095.5	3,431.0	3,823.6	4,099.0
その他の運輸作業量	506.8	655.8	854.3	993.8	1,202.0
農業用運輸作業	—	195.0	309.8	373.6	493.7
総計	3,325.1	3,751.3	4,285.3	4,817.4	5,301.0
(1954年を100とする指数)	100	113	129	145	159
農業機械作業全量中 J Z D の作業に 向けられた割合%	76.6	77.0	80.7	85.5	91.8

註 1) 単位は凡て 1,000 hactar.

2) Statistická Ročenka Republiky Československé 1959. pp. 268~270
より作成。

第19表 STSにおける労働者の労働生産性

	1954	1955	1956	1957	1958
労働者一人当作業遂行量	1900	1890	2240	2680	2860
1954年を100とする同上指数	100.0	99.5	118.0	141.0	150.5
運転労働者一人 当り作業遂行量	2820	2630	3560	4180	4400
1954年を100とする同上指数	100.0	93.3	126.3	148.5	156.0

註 1) 第16表及び第18表から作成。
2) 作業遂行量の単位は hactar を表す。

チエコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

二二六

有機的連繋の深化を如実に示すものといえよう。一STS当り遂行量を、次にみると、全国では約六万五千四百ヘクタールとなるが、前述の如く、一STSが包括するJZDの総面積は約一万五千ヘクタールであるから、六万五千四百ヘクタールのうち九二・二%がJZDに向けられた作業とするならば、JZDにおける作業集約度が極めて高くなっていることを知ることができる。即ち、STSの作業がJZDに集中、集約されていること、その密度が濃化していることがわかるであろう。

次にSTSにおける労働者の生産性についてみてみよう。第19表はSTSにおける全労働者一人当作業遂行量と、運転関係労働者一人当作業遂行量とを年次的に比較したものである。

これによると一九五六年を劃期として、労働生産性が著しく向上してきたことが指摘されよう。

一九五八年は、一九五四年の一、九〇〇ヘクタールに対して二、八六〇ヘクタールと、全労働者一人当り五割の向上を示し、運転関係労働者については二、八二〇ヘクタールから四、四〇〇ヘクタール、五割六分の向上を示している。一人当り四、四〇〇ヘクタールの作業量という点においても、三年間に五六%の生産性向上という点においても、その成果は驚異的であるとい

つてよい。

註(一) 第五章第三節参照。

註(二) Handbook. 1959. pp. 89~90. 参照。

五 農業生産協同組合 J Z D

(1) 農業生産協同組合の展開過程

前章第一節にみた如く、また後節で触れる如く、農業生産協同組合は、今日チェコスロバキア社会主義農業の根幹をなしているわけであるが、その建設過程は必ずしも容易なものではなかった。いま、その過程を素描すれば、次の如くである。^{註(二)}

一九三八年以前、即ちチェコが資本主義共和国であった時代の農業は次の如く特徴的であった。即ち、全耕地面積の四〇%以上を所有する一、五〇〇人の大地主と、全耕地面積の僅かに三〇%の上にひしめく二六〇万の零細農民。第一次大戦後の一九一八年土地改革は、その期待に反して農民経営に何程の寄与も与えなかった。六四万三千の小農民が受取った土地は、丁度六三万三千ヘクタール、つまり一戸当り一ヘクタールだったのに対して、二、〇〇〇人の大地主は二二万六千ヘクタールを与えられ、更に、収用された土地の四五%に上る一八三万二千ヘクタールが元の所有者、つまり大部分昔の封建的貴族の手に返されたのである。

この様な状態であったから、戦前共和国時代の二十年間は、農業技術の水準も、百年前と少しも変らない程の停滞を示し、全国を通じて三、六八二台のトラクターが使用されているだけで、絶対多数を占める零細農は農業機械

とは全く無縁であった。総ての農業機械、特にトラクター、蒸汽鋤、打穀機等は、あるとすればその凡ては大地主又は大農の所有であった。これらの農業機械は屢々小農民に貸出されたけれども、勿論無償ではなく、封建時代と隔たること遠からざる賦役、地主又は大農に対する労働の提供を強いられるという状態であった。

此処に、零細農たちが自己の立場を労働者階級のそれと同じ様に感じ、彼等と提携して共通の敵、即ち資本主義社会制度打倒の斗争への途に傾いた基礎がある。当時、チェコにおいても、スロバキアにおけると同様、大部分の労働者は農村地域に居住していたから、労働者は、農村生活、農民の要求に絶えず密接に接触していた。かくて、既に第二次大戦前、労働者たちは、小農民や土地をもたない零細農と、緊密な同盟関係に入っていたといつてよい。この点はチェコスロバキアにおける革命を理解する上で、極めて重要な点である。

第二次大戦前、チェコスロバキア共産党は農民に積極的に働きかけ、彼等に重要な影響を与えたが、その主要な政策目標の一つは、労農同盟の強化であったことはいうまでもないが、この点はまた、後の社会主義建設過程における労働者階級と農民の提携の成果を理解する上で、重要な意味をもつものであるといわなければなるまい。

扨て、一九四五年の初め、人民民主主義共和国が成立するや、政府は農民の社会的条件を緊急に改善するために諸種の政策をとり始めた。就中、我々はその土地改革に注目しなければならぬであろう。

政府が先ず最初に行なったものは、計画に従って戦犯、ナチ協力者から没収した耕地、一六〇万九千ヘクタールの零細農への分配であった。即ち、これらの土地を平均一三乃至一五ヘクタールづつに区分し、これを土地を持たない農業労働者と、一部分、生活を維持するのには足りない土地しかもたない零細農に分配した。もちろん、これで私有の大土地が完全に廃止されたわけではなかったが、しかし、大地主制度解体の第一歩は、これによって刻ま

れたわけである。

改革の第二段階は、大部分の土地が大土地所有者の手に渡るといふ様な不正が、公然と行なわれた一九一八年土地改革の結果を改訂することであったが、この改訂を現実のものとするためには、それ以前に労働者も農民も更に多面的な斗争を進めなければならなかった。戦前の土地改革の改訂に関する法律が通ったのは、一九四七年であったが、それが実際の強制力をもつに至ったのは、労働者階級が勝利を収めた一九四八年二月のことであり、それまでは、労働者は、農民の、「土地はその耕作者である農民へ！」という要求を支援し、また農民は労働者の国有化産業を強化し、拡大するための努力を支援するという斗争が不可欠であったのである。

この改正法にもとづいて、更に九四三、二七一ヘクタールの土地が農民に分配されることとなった。一九四八年二月以降、勤労農民への農地の公正な分配は、この法律を基礎として、土地私有を五〇ヘクタールまでとし、投機を禁ずることによって完遂されたのであった。この最後の第三段階によって、大私有地の痕跡は最終的に一掃され更に二五三、〇〇〇ヘクタールの土地が農民に分配されて、「土地を農民へ」が実現され、土地所有にもとづく地主の不労所得は廃絶されたのであった。

尚、没収された土地の極く一部分は国有となり、国营企業に移管されることとなった。人民民主主義共和国第一年度における国营農場の面積は、全農地面積の十分の一以下であったが、一九五八年には、前章にみた如く、約一七%にまで増加している。

ところで、右の如き土地改革の過程は、社会主義農業の建設という観点からするならば、いわばその基礎工事を終了したことを意味するに過ぎない。農業生産が、孤立分散したところの、遅れた小農民経営にゆだねられている

限り、たとえ国家の最大限の援助が彼等に払われたとしても、国民の生活水準を改善するのに必要な、生産の確保を、その様な小農民経営にいつまでも期待することは困難である。これを保証する唯一の途は、先祖伝来の農法や慣習を棄てて近代的な機械、技術を導入し、大規模農業生産を可能ならしめる様な条件を、農民の間に創りださせることではなければならない。

しかし乍ら、大規模農業生産を、資本家的にではなく、社会主義的に創造するということは、チェコスロバキアにおいても、非常に困難な課題であった。他人の労働の搾取の上に、大規模生産を行なうなどということは、もちろん、あり得ないのであるから、そこでの唯一の可能な途は、分散した小農民経営を、機械力をつけてより生産性の高い耕作を可能ならしめる様な、大きな単位に合併させること、しかも一方、農民がこれらの農場を經營することの自由、その収穫の成果を分配することの自由をそのまま保有させる様にしておくことではなければならない。と同時にまた、一方では、農民が土地やその財産に対して、極めて強い執着をもっているということについての考慮が、十分払われなければならなかった。農民の土地に対する伝統的な私有財産的觀念を打破する可能性は、ただ漸進的な、農民自身の実際的な経験の基礎の上にとって進める途以外にはない。

一九四九年、チェコスロバキアの農業においてとられた途も、これ以外のものではなかった。こうして、古くからの農業生産協同組合の理念が、大規模農業生産を發展させる最も適切な方法として採用され、且つまた土地の耕作、全農場の経営へと拡げられることとなったのである。この農業生産協同組合は全村を一つに結合することを目的とした点から、前章でみた如く、「統一農業生産協同組合」と呼ばれた。

協同組合經營方式への第一段階、即ち旧来の小経営から、より大規模な農耕方式への移行の第一段階は、全村の

同意を得た計画にもとづく共同収穫と、播種のための共同準備作業であった。かくて、一九五〇年、共和国全村落の二二%が、この方式で収穫作業を行なうに至った。統一農業協同組合の第一形態が、即ちこれである。

しかし、この第一形態は、農業共同化のいわば、第一歩を意味するに過ぎず、農業生産の機械化、大規模化を実現するためには、各農家が所有する耕地を一つにまとめて集団化し、その耕作、収穫等の作業を共同で行なえる様にするのが絶対不可欠である。

耕地の昔からの境界が取り払われるという、農村の生活にとって破天荒の変化が、一九四九年から始まった。既に同年秋には、百万ヘクタールの土地がこの集団化に参加している。即ち、統一農業協同組合の第二形態への移行が始まったのである。

統一農業協同組合の第一形態と第二形態の主要な差違は、土地が集団化されているか、いないかにあるといえよう。第二形態においても尚、家畜や機械、施設等は、協同組合に加入した農民の個人財産として、とどまっております。凡ての組合員の共同労働によって得られた収穫は、協同組合員たる各農家の保有反別に比例して、分配されるのである。併し乍ら、この第二形態への移行は、農民に、機械のより有効な、より経済的な利用と、作業の組織化を可能ならしめ生産力の上昇をもたらし、これを通して、大規模農業が實際上利益の多いものであることを確信せしめるに至った。

もちろん、これで農業生産、殊に家畜生産上の重要問題が解決されたわけでは決してない。圃場における作業を十分に組織化するためには、協同組合員自身が、必然的に共有の施設、役畜、農業機械等を所有しなければならぬ。と同時に、問題は生産物の分配についても起る。作業が共同化されるに従い、生産物のもっと正当な分配方法

即ち保有反別割の分配ではなしに、組合員の作業に応じた分配ということが要求されてくる。

この様にして、統一農業協同組合の第三形態が生みだされたのである。ここでは、農業協同組合員は、家畜を組合の共同飼育場で飼育し、農場施設や建物を、個人有から協同組合有に移管する。また、組合員の報酬は、主として、各人の作業に応じて決定される。そのために、作業の相当部分が、所謂作業単位で表わされる様になり、それに従って、現金と現物で、各組合員のとり分が支払われることとなった。作業単位がいくらになるかは、その協同組合の経済状態によって、自ら異なる。尚、第二形態と同様、第三形態においても、未だ、組合員が協同組合に移管した土地の反別割による収益分配が、収入の一部をなす様になっているが、それは、もはや第二形態におけるが如く、組合員収入の支配的部分を占めることはないわけである。事実、非常に経営の良い協同組合では、組合員は専ら作業割によってのみ、収益分配を受けるところまで高度化している（第四形態）。尚、この形態では、既に組合は、施設拡充、組合員の文化的、社会的要求等を満すための基金を財政上積立てている。また組合員は、自家用として〇・五乃至一ヘクタールの土地と乳牛一頭、家禽を私有することができる。

後にみる如く、今日チエコスロバキアにおいて、最も普及している統一協同組合の形態は、この第三、第四形態であり、この形態が、チエコスロバキアの農村における社会主義的諸関係を典型的、集中的に表現しているといつて差し支えない。

第20表は、以上に述べた、チエコスロバキアにおける農業の、社会主義的改造の展開進度を端的に示す指標として、役に立つであろう。更に第21表は、この展開過程を、チエコ地方と、スロバキア地方の二地区別に示したものである。

第20表 社会主義化の発展指数

	社会主義部分		J	Z	D
	農用地	耕地	農用地	耕地	
1949	10.9	8.0	0.1		0.1
1950	22.1	20.1	10.5		11.1
1951	27.6	26.7	16.8		17.8
1952	43.2	43.1	34.4		35.9
1953	44.7	45.1	35.8		37.6
1954	41.9	42.1	31.4		33.2
1955	42.6	43.2	31.7		33.7
1956	47.8	49.0	37.1		39.6
1957	65.4	67.9	58.0		61.7
1958	77.5	80.6	72.5		76.6

- 註 1) Statistická Ročenka P. 266 により作成。
 2) 農用地，耕地面積中，共和国全体について，社会主義部分，JZD 部分の占める割合を年次別に示す。
 3) JZD については，組合員附帯地をも含む。

第21表 地方別社会主義化の発展指数

	チェコ地方				スロバキア地方					
	社会主義部分		J	Z	D	社会主義部分		J	Z	D
	農用地	耕地	農用地	耕地		農用地	耕地	農用地	耕地	
1949	11.4	8.1	0.1	0.1	10.1	7.8	—	—		
1950	24.8	21.4	11.5	11.7	17.7	17.5	9.0	10.1		
1951	30.4	27.4	17.8	17.8	23.0	25.2	15.3	17.8		
1952	41.5	40.5	30.9	32.4	46.0	48.0	40.0	42.6		
1953	46.3	45.6	36.2	37.5	42.1	44.0	35.0	37.8		
1954	43.2	42.5	31.4	32.7	39.7	41.3	31.2	34.2		
1955	44.8	44.4	32.2	33.7	38.9	40.8	30.8	33.6		
1956	52.1	52.1	40.0	41.8	40.5	43.0	32.7	35.7		
1957	71.9	72.7	64.4	66.4	54.4	58.6	48.4	53.2		
1958	84.2	86.0	79.7	82.5	66.6	70.4	61.7	66.2		

註 1) 第20表に同じ。

チエコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

二四三

即ち、先ず共和国全体として、農業における社会主義建設の開始された一九四九年には、統一農業生産協同組合の支配する農地面積は農用地に

においても、耕地においても、わずかに〇・一%、国営企業を含めても一割に満たない。ところが、前述の如く、一九五〇年には一割に上昇、本格的建設のテンポが示され、一九五二年にはすでに三五%前後にのぼったが、その後停滞を示し、一九五七年より、再び急速な建設が進められて、一九五八年には、農用地において七二・五%、耕地において七六・六%が、統一農業生産協同組合に支配されるに至ったことを示している。一九五七年以降の本格的展開は、一つの劃期として注目に値しよう。

チェコ地方とスロバキア地方の地方別展開過程で注目されることは、総体的に、チェコ地方における社会主義的改造の進度が、スロバキア地方のそれに比して、早いことであろう。JZD農用地において、一八%、耕地において一六・三%の差異を示している。これは、JZDの編成が、既にその開始年度で、スロバキア地方において、一年のおくれを示していることともかかわっているといえよう。チェコ地方においては、今日までに農地面積の九割近くが、社会主義的生産組織の支配下におかれたわけである。

いま、これを実数で示せば、第22表の如くである。これによってみると、共和国全体で、社会主義部分の占める面積は、一九五九年、農用地面積において、七三九万ヘクタール中五六八万ヘクタール、耕地において、五一五万ヘクタール中四一五万ヘクタールに及んでいることがわかる。もちろん、JZDがその圧倒的部分を占めるものであることは、ことわるまでもない。

ここで、もう一つ興味あることは、私的独立経営、つまり、まだJZDを組織していない個人農の場合、一五ヘクタール以上の大きな経営規模の農家の占める面積が、農用地においても、耕地においても非常に低い比率しか占めていないことである。これは、土地改革における貧農中心の土地分配の一端を示すものであり、また年次の減

第22表 生産組織別農用地及び耕地面積

	農 用 地					耕 地				
	1955	1956	1957	1958	1959	1955	1956	1957	1958	1959
総 面 積	7,294	7,414	7,377	7,336	7,389	5,095	5,156	5,119	5,119	5,153
社 会 主 義 部 分	3,020	3,108	3,482	4,738	5,682	2,156	2,224	2,506	3,477	4,148
農 協 部 分	1,101	1,149	1,234	1,266	1,347	693	736	801	840	888
農 組 合 員 附 帯 地	1,810	1,842	2,115	3,242	4,021	1,377	1,399	1,603	2,462	3,029
私 的 独 立 經 営 地	109	117	133	230	314	86	89	102	175	231
私 的 独 立 經 営 上 地	4,076	4,139	3,735	2,457	1,620	2,877	2,881	2,566	1,601	985
15ha 以 上 地	470	415	274	113	52	350	310	203	81	34
不 毛 地	126	115	117	105	60	22	26	27	24	9
未 墾 地	72	52	43	36	27	40	25	20	17	11

註 1) Statistická Ročenka 1959. PP. 225~226 より作成。

2) 単位 1,000 ヘクタール。

少率が急テンポであることは、この様な比較的経営規模の大きな農家が、卒先してJZDの中に入っていったことを示すものとみてよいであろう。

最後に、現状を総括する意味において、一九五八年十二月三十一日現在の、生産組織別経営体数並びに農用地面積を、共和国全体と、チェコ、スロバキア地方別に示した、前掲第14表をもう一度みておこう。前述の如く、一九五八年末において、国营企業数は二万八千、JZD一万二千、その組合員六三万世帯、私的独立経営が全部で九五万世帯、そのうち、農地二ヘクタール以下の零細農が七四万世帯、二五ヘクタールのものが一二万世帯、両者併せ

て八六万世帯という圧倒的多数を占めている。これらの零細農の大部分は、既に述べたJZDのI型乃至II型に編成されているわけであるが、ここでも、私的独立経営の方に算入されていることは、他の統計と同様である。

地方別では、チェコ地方の方が経営体数においても、農用地面積においても、遙かに多いが、これは、もちろん第二章にみた通り、チェコ地方の面積がスロバキア地方の殆ぼ二倍近くあることに、基本的には対応しているためである。

註(1) People, Work, Trade Unions in Czechoslovakia, 1959. pp. 71~78. 参照。

(2) 組織及び運営

所謂統一農業協同組合は、どの様に組織され、運営されているか、ここでは、その概略を、最も普遍的な第三、第四形態の場合についてみてみよう。^{註二}

先ず組合員資格であるが、もちろん協同組合であるから、その加入は別に強制されない。チェコスロバキアの市民権をもつものなら、男女を問わず、一六才以上の誰に対しても加入の門戸が開かれている。

協同組合の組織及び運営に関する定款は、農業協同組合全国会議において賛成を得た模範定款があり、各組合はこれに基づいたいわゆる業務規則に基礎をおいてつくられる。この業務規則は全協同組合に対して拘束力をもっているわけである。

加入が決定されると、農民は所有地、家畜、農用器具等を協同組合に移管しなければならない。これに加えて、所有農場建物は、これを、共同耕作目的に必要な限り、協同組合の利用に委ねなければならない。また、農民の土地面積に照応した種子を組合に提供し、家畜群に加えた家畜頭数に比例した飼料を組合に供給する。これらの組合

に移管された家畜、農機具及び農場建物については、その評価額の二〇%が永久準備積立金として、協同組合に供託されなければならないが、残余部分については、組合総会の決定によって、あらかじめこの目的のために毎年準備されている基金の中から、年賦払いで、組合が加入農民に払戻すこととするのである。

土地は組合員の財産として残るのであるから、若し協同組合から脱退する様なことがあれば、農民は、再びそれを個人財産として、使用することができるようになっている。一般的にいつて、各農家は自家用生産のために、一戸当たり〇・五ヘクタールの地所をもっている。

それでは、この様な農協はどの様にして運営されるか。協同組合運営に関連した凡ての事項は、組合の最高機関である組合総会で決定されることはいうまでもない。ここで役員の選出、そのリコールが行なわれる。リコールは役員が定款或は業務規則を守らない場合、組合員によって行なわれるわけである。総会から次の総会までの間の執行機関は、協同組合の委員長を長とする常置委員会がこれに当ることになっているが、この委員会は五人乃至九人の委員からなり、総会で二年毎に選出される。

ところで、協同組合の生産上、組織上の基本単位は、作業隊であるといえよう。この作業隊は、組合の年間計画の一部分としての特別の生産課題をもち、且つ、その生産高について独立した会計を行う。隊員は通常二〇乃至二十五名からなっているが、その規模はもちろん協同組合農場の大きさによって異っている。家畜生産においては、一つの農場が基本単位であり、その中が飼養家畜にに応じて、幾組かの飼育者グループに分けられることになるわけである。

次に、組合員の報酬はどうか。協同組合の組合員は、いわば共同所有者である。従って、組合員は賃金を受けと

るのではなくて、共同の生産物の配当を受けるわけである。この場合、配当の大きさは協同組合自身の収益と各人の作業量の如何にかかわっている。

現実の支払は一部を現金で、一部を穀物、馬鈴薯、野菜等の現物で支払われる。この支払の基礎が作業基準であって、即ち、組合員が八時間労働内で遂行すべき全作業量をもってきめられるのである。この作業量は、もちろん普通の作業員が遂行することのできる量であることはいうまでもない。

作業基準を決めるために、凡ての作業は、その熟練度、肉体的困難性に従って、七つの範疇に分けられる。軽労働で熟練をそれ程必要としない作業、例えば清掃、袋の修繕等は第一及び第二の範疇に分類され、圃場作業、穀物輸送作業等の大部分は第三及び第四の範疇に入る。一番高い第七の範疇は、機械工、独りで修理もできるトラクタ―運転手の作業を内容としている。

組合員各自は、その遂行した作業基準に従って、作業単位数に照応した権利を与えられる。例えば、第一範疇の一日八時間作業（遂行された作業基準）は、〇・五〇作業単位数に等しいとされ、第二範疇の場合は〇・七五作業単位数、第三範疇の場合は一単位数に、夫々等しく、この様に第七範疇の二単位数に至るまで、この評価は上昇してゆくわけである。かくの如く、協同組合の各組合員は、ただに作業量が勘案されるのみでなく、その要求されるエネルギー支出、熟練度が計算に入れられた上で、配分が保証されることとなる。この配分は、一年間に組合員が遂行する作業単位数に対応して支払われるわけであるが、これに加えて、例えば、家畜の体重の、平均より急速な増加が行われたとか、平均ヘクタール当り収量よりも高い収穫を上げたとかいう場合の様に、平均以上の成果に対する報奨金制度もある。

第23—a. J D Z III・IV型農地1ヘクタール当り収支(収入)

	総粗収益	収 入 内 訳					
		植 物 生 産			動 物 生 産		
		義 務 供 出 額	政 府 購 買 及 所 他 全 販 売 額	計	義 務 供 出 額	政 府 購 買 及 所 他 全 販 売 額	計
1956	2815.6	556.5	461.7	1018.2	654.3	777.3	1431.6
1957	3107.9	572.0	483.4	1055.4	651.3	906.6	1557.9
1958	2985.8	593.8	522.0	1115.8	637.6	796.5	1434.1

註 1) Statistická Ročenka 1959. P. 265 より作成。

2) 単位はチェコ・クロネ。

3) 共和国全体のみを示す。

現金並びに現物での組合員に対する実際の支払いは、完遂された作業単位の評価額の八〇%が月割りの形で行われ、組合決算が行われた後、年度末において全部の精算がなされることになっている。もちろん、組合員は、これに加えて、自己の保有地からの現金、現物での収入をあげることができる。

この他、組合員は、健康保険、老令年金、その他の社会保険を組合から無料で受ける資格を与えられる。また、各組合は、その経営の収益の一部を供託した社会基金をもっており、この基金を、例えば、組合員の病気、出産に際し、或は家族手当等、附加給部分として使用する。

この外にも、種々の基金制度がつけられているが、なかんずく重要なものは、前述の所謂永久積立基金、農民が協同組合に加入した際、組合に移管する家畜、農用施設、建物の評価額の二〇%を供託したものである。協同組合は、更にこの二〇%分に加えるに、毎年、現金収入の少くとも一二%を積立てすることになっている。これによって、組合は、設備投資、経営の拡大、改善を行ない、一般的な改修を施すわけである。従って、この基金は組合員の間には分配することは許されない。

この外の基金としては、種苗及び飼料基金、特別基金、文化基金等を

第23—b. J Z D III・IV型農地1ヘクタール当り収支（支出）

	総支出	支 出 内 訳					純収益	
		税, 保 險 金, 利 子, 信 用 賦 払 金	種 苗 費	肥 料 購 入 費	飼 料 及 飼 厩 購 入 費	機 械 ・ ト ラ ク タ ー ・ ス テ ー シ ョ ン へ の 支 払		ブ リ ガ ー ド へ の 支 払
1956	1300.9	180.0	96.0	122.1	232.7	128.7	60.8	1,514.7
1957	1446.3	190.9	120.2	130.4	241.6	182.2	62.8	1,661.6
1958	1417.4	175.7	125.0	119.7	221.8	259.2	56.4	1,568.4

註 1. 前表に同じ。

チエコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

二五〇

数えることができる。種苗及び飼料基金は、種苗や飼料の予備を貯えるために使われ、特別基金は、予期されざる出費のため、文化基金は、図書館用書籍、組合員の専門的な訓練、旅行、芸術家の招聘、スポーツ用品の購入、或いは楽器、テレビ等の購入等に充てられる基金である。

いまJZDの実際の収支配分が、どの様に行なわれているかを第23—b表によって示そう。これは、JZD III及びIV型における収支配分を、農用地一ヘクタール当り金額（チエコスロバキア通貨のクローネ）で算出したものである。

一九五八年についてみると、総粗収益は二、九八六クローネ、そのうちわけの主なものについてみると、動物生産の方がやや多く、一、四三四クローネ、植物生産が一、一一六クローネとなっている。義務供出額と販売額とでは、それぞれほぼ半々づつであるが、植物生産では、義務供出額の方がやや多く、動物生産では、やや少なくなっている。この両者収入を併せて、総粗収益の八五・三%が占められている。

次に支出の部をみると、第23—b表から、総支出は、一、四一七クローネ、その主なものうちわけをみると、機械・トラクター・ステーションに作業を依頼した分の支払いが、一ヘクタール当り二五九クローネ、以下、飼料・厩肥購入費二二二クローネ、税・保険金等一七六クローネ、種苗費一二五クローネ

第23—C. J Z D III・IV型農地1ヘクタール当り収支(配分)

	純収益	配 分 内 訳						
		不配分基 金	組合員への 貸付資金	へ 払 金	運 營 基 金	保 全 基 金	社会基金	文化基金
1956	1,514.7	185.5	—	20.5	53.4	11.4	13.7	1,229.4
1957	1,661.6	235.7	6.2	23.1	73.6	18.2	20.7	1,283.8
1958	1,568.4	249.4	18.1	32.1	85.0	25.9	22.5	1,134.1

註 1. 前表と同じ。

肥料費一二〇クローネ、ブリガードへの支払い五六クローネの順になっており、機械・トラクター・ステーションへの支払いは、総支出の一八・二%、飼料・厩肥購入費が一五・六%、肥料費が八・四%の割合になっている。

年次的変化で眼立つ点は、種苗費と機械・トラクター・ステーションへの支払いが、比較的顕著に増大してきていることであろう。

総粗収益から、総支出を差引いた残余が、純収益であるが、一九五八年における一ヘクタール当り総純収益は一、五六八クローネとなっている。前年に比して、やや低いのは、五八年の天候不良にもとづく不作の影響とみられる。第23—C表によって、その主要な配分内訳をみると、もっとも大きい部分を占めるのが、組合員に対する、作業単位を基礎とした配分で、一、一三四クローネ、総純収益の七二%がこれに充てられていることが分る。次に多いのは、不配分基金、即ち農民の永久準備積立基金に組合が附加積立てる基金であって、二四九クローネ、一五・九%となっており、以下、社会基金八五クローネ、運営基金三二クローネ、文化基金二六クローネ、報奨金二三クローネ、貸附資金一八クローネの順となっている。

ところで、農業生産協同組合は、もちろん、政府によって、全面的な援助を与えられる。政府のこれら農業生産協同組合に対する援助は、種々の形で行わ

れているが、大別していうならば、技術教育面に対する援助、資金面での援助、経済上の援助に分けられるであろう。技術教育については、例えば農林省がスポンサーになって、協同組合の組合長、農場経営者、家畜飼育専門家、会計士及び組合役員に対する、期間一年迄の講座を設けている。受講者には、食事、宿泊施設が提供され、協同組合はこれらの受講者に、作業に従事している時と同様、現金及び現物で収益を配分する。

資金面については、例えば各種のクレジットが与えられる。農業機械購入資金、文化会館、協同組合洗濯所、図書館等建設資金、電気施設設備資金、映画館、劇場、保育所等設置資金等である。

経済上の援助としては、政府が、化学肥料、高品質の種苗、人工受精用精液等を低価格で組合に提供している。この外、政府は冬季リクリエーション計画を樹て、費用の大部分を政府がもって、多数の農民を一週間に亘って首都プラハに招待する等の行事も行なっている。

以上、概観的に統一農業協同組合の組織及び運営等をみてきたのであるが、それでは、これらの農業協同組合は現在、チェコスロバキアの農業の上で如何なる位置を占め、役割を負っているであろうか。

註(一) Handbook. 1959. pp. 87~88 参照。

(3) JZDの農業生産上に占める地位

以上述べ来たところより明かなことは、統一農業生産協同組合が、チェコスロバキア社会主義共和国における社会主義大規模農業の基本的組織となっているということである。そこで、この事実を明らかならしめるため、ここで若干の統計的指標を示しておくこととしよう。

先ず第24表はチェコスロバキアにおける総農業粗生産額を一〇〇とした、各農業生産組織における生産割合を示

第24表 生産組織別粗生産割合

	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
社会主義部分	21.6	27.6	36.2	33.9	33.8	36.3	39.8	54.2
国营企業	10.9	11.5	12.2	12.8	13.0	12.2	12.7	13.7
J Z D III・IV	10.7	16.1	24.4	21.1	20.8	24.1	27.1	40.5
組合員附帯地経営	6.3	8.0	10.0	11.3	11.1	11.9	13.6	20.5
私的独立経営	72.1	64.4	53.8	54.8	55.1	51.8	46.6	25.3

註 1. Statistická Ročenka 1959. p. 222 より作成。

したものである。ここで、社会主義部分というのは、国营企業と統一農業協同組合のⅢ及びⅣ型を指し、組合員附帯地とは、Ⅲ及びⅣ型協同組合の組合員各自の保有する〇・五ヘクタール前後の保有地を意味する。従って、それ以外は、凡て私的独立経営の中に入る。

これによると、集団化が開始されて間もなくの一九五一年には、尚、圧倒的に農地改革によってつくりだされた自作農層、即ち私的独立経営が生産上、主要な地位を占めていることがわかる。もっとも、この私的独立経営の中には、農業生産協同組合の初歩的な形態であるⅠ型、Ⅱ型へ参加している農民も含まれているわけであるから、純粹な個人農のみとみてはならないが、それにしても、総粗生産額の七割以上、七二・一％がこれらの経営によって占められており、社会主義部分の占める比重は、わづかに二一・六％で、特に農業生産協同組合、即ちJ Z D III及びⅣ型の占める割合は、国营企業粗生産を下廻り、一〇・七％を占めるだけである。

私的独立経営が、高次のJ Z D III及びⅣ型に編成されてゆく過程、即ち、換言すれば、J Z D III及びⅣ型の比重が増大してゆく過程は、その後、堅実に発展してゆくが、しかし、そのテンポはそれ程急激ではない。一九五七年において二七・一％、五一年に比して、一六・四％の増を示す程度であるが、一九五八年にお

第25表 生産組織別市場向生産割合

	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
社会主義部分	28.3	34.8	45.3	45.6	44.5	47.0	49.4	63.2
国营企業	17.7	17.5	18.3	19.8	19.1	18.2	18.6	18.4
J Z D III・IV	10.6	17.3	27.0	25.8	25.4	28.8	30.8	44.8
組合員附帯地経営	1.7	2.2	4.2	4.1	4.8	5.3	5.5	11.4
私的独立経営	70.0	63.0	50.5	50.3	50.7	47.7	45.1	25.4

註 1. 第24表に同じ。

チエコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

二五四

いて、この傾向は一変する。即ち、前年の二七・一％に比して、J Z D III及びIV型は、一挙に総粗生産額の四〇・五％を占めるに至り、前年比増一三・四％と、飛躍的増大をみせているのである。このことから、一九五八年は、天候が悪く、農業生産は総体において減収を示すという条件の悪い年であったにもかかわらず、チエコスロバキア農業の社会主義的大規模農業への再編過程において、農業生産上極めて重要な転換点をなすものであるといわなければならない。

これに対して、私的独立経営の農業粗生産に占める役割は、急激に落ち、五年七二・一％に対し四六・八％減、前年五七年四六・六％に対し二一・三％減の二五・三％となっている。国营企業の占める役割は、当然乍ら、大きな変化はない。

次に第25表によって、市場向生産におけるJ Z Dの役割をみると、市場向総生産中に占める、各生産組織別比率は、大体粗生産額における傾向と同じ傾向を示しており、一九五七年までは、私的独立経営がJ Z Dを上廻り、優位に立っているが、一九五八年において、両者の立場は逆転する。即ち、総市場向生産中、J Z Dはその四四・八％を占めるに至り、国营企業と併せて、社会主義部分は、総市場向生産の六割三分に及ぶのである。

組合員の附帯地経営が、市場向生産において、総体に非常に低い地位しか占め

第 26 表 生産組織別生産物中市場向比率

	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
総 数	43.4	46.1	47.2	44.5	43.6	44.8	46.4	49.0
社会主義部分	56.9	58.1	59.1	59.9	57.5	58.0	57.5	57.1
国营企業	70.6	69.9	71.1	68.7	64.2	67.0	67.8	66.0
J Z D III・IV	42.9	49.6	53.0	54.5	53.4	55.5	52.7	54.1
組合員附帯地	11.9	11.2	19.5	16.1	18.6	19.9	18.8	27.2
私的独立経営	42.1	45.1	44.4	40.9	40.1	41.2	44.9	49.3

註 1. 第 24 表に同じ。

ていないことは、本来、附帯地が、組合員家族の自給的生産を目的とするものであることから当然といえようが、それにしても、一九五八年には、五一年の一・七％に対し、一一・四％にまで上昇していることは注目に値いしよう。

そこで、各生産組織が、それぞれの生産総額中、どの位の割合で市場向け生産をしているかをみてみよう。第 26 表によってみると、先に述べた組合員附帯地の自給性が、ここでは、明らかに示されている。

もっとも市場向け生産の高い経営は、国营企業であって、一九五八年六六・〇％を示しているが、この場合は、表にみる通り、五一年当初七〇・六％と七割台を示したのに対し、その後漸減傾向を示している。

J Z D と私的独立経営とでは、J Z D の市場生産割合の方が私的経営より優越しており、生産の過半五四・一％が市場向けであるが、私的独立経営では、わずかに過半に及ばない。但し、両者間の格差は、一九五二年以来、特に拡大している様なことはない。

次に、主要農産物について、その生産上、J Z D の占める役割を検討してみよう。

第 27 表は、チェコスロバキアにおける主要農産物について、一九五八年度作付面積及び、作物別作付総面積を一〇〇とした指数を、各生産組織別にみたもので

を占める。

これによると、作物別作付総面積中、JNDが占める位置は、殆どどの作物において、他の凡ての生産組織に対

第27表 生産組織別主要農産物作付面積及び割合

	実数				比率					
	総面積	国営部分	農協部分	組合員地 組附	私的経営	総面積	国営部分	農協部分	組合員地 組附	私的経営
小麦	737,506	104,244	410,427	18,772	204,063	100.0	14.1	55.5	2.5	27.9
ライ麦	498,293	69,034	274,520	4,781	149,958	100.0	13.8	55.2	1.0	30.1
大麦	669,285	101,334	354,708	31,704	181,539	100.0	15.1	53.1	4.7	27.2
燕麥	506,882	77,909	258,218	14,131	156,624	100.0	15.4	50.9	2.8	31.0
トウモロコシ	180,215	13,157	70,043	42,264	54,751	100.0	7.3	38.9	23.5	30.5
大豆	19,469	5,005	11,771	457	2,236	100.0	25.7	60.5	2.3	11.5
アブラナ科	38,678	10,643	24,809	5	3,221	100.0	27.4	64.1	0.1	8.3
種まき	10,312	751	6,552	141	2,868	100.0	7.3	63.6	1.4	27.8
亜麻	55,503	10,618	32,845	10	12,030	100.0	19.1	59.3	0.2	21.5
甜菜	246,115	50,746	154,049	90	41,230	100.0	20.7	62.6	0.0	16.7
馬鈴薯	607,237	47,952	258,381	68,893	232,011	100.0	7.9	42.5	11.4	38.2
飼料用根菜類	104,093	16,353	44,959	8,569	34,212	100.0	15.8	43.3	8.2	32.9
飼料用草類	1,244,098	277,764	666,945	17,392	281,997	100.0	22.4	53.8	1.0	22.8

註1. Statistická Ročníka 1959. P. 232 より作成。

2. 単位は1ヘクタール。

3. 1958年度の実績を示す。

第28表 生産組織別1ヘクタール当り収穫量

		総平均	国営地・その他政府管掌地	J Z D	その他経営
小	麦	18.3	19.2	18.6	17.3
ラ	イ 麦	19.0	17.7	20.0	17.8
大	麦	17.9	18.2	18.3	17.3
燕	麦	17.4	15.3	18.4	16.9
ト	ウ モ ロ コ シ	27.3	28.5	28.4	26.3
莢	豆	9.8	9.1	9.6	11.5
ア	ブ ラ 菜	12.4	12.2	12.7	10.8
種	け し	5.0	3.9	5.2	4.9
皿	麻	23.6	22.0	24.6	22.4
甜	菜	299.1	293.4	307.4	275.7
馬	鈴 薯	109.1	87.3	102.7	118.0
飼	料 用 根 菜 類	331.6	318.2	361.0	307.0
飼	料 用 草 類	46.5	39.5	48.5	47.9
牧	草	34.8	27.4	37.8	34.7

- 註 1. Statistická Ročenka 1959. p. 234 より作成。
 2. 単位はクオーターで示す。
 3. JZD は組合員附帯地を除く。

し、圧倒的であり、私的独立経営が比較的接近した面積で作付しているのは、トウモロコシ、馬鈴薯、飼料用草類等ぐらいのものである。逆にいえば、この面において、JZDがややおけているということになるのであるが、他の作物については、いずれも作付総面積の過半を占め、JZDの農業生産の上に果している役割を極めて明確に示しているといえよう。

JZDが経営する耕地面積、二四六万二千ヘクタール中、もっとも作付面積の多い作物は、飼料用草類の六六万七千ヘクタールで、耕地の二七・一％に作付けされる。次いで小麦の四一万ヘクタール、大麦の三五万五千ヘクタール、ライ麦二七万五千ヘクタール、燕麦、馬鈴薯の二五万八千ヘクタールの順序となっている。耕地面積に対する対比では、小麦一六・七％、大麦一四・四％、ライ麦一一・二％、燕麦・馬鈴薯一〇・五％である。

第29表 生産組織別家畜頭羽数

	牛	牝牛	豚	6ヶ月以上の牝豚	羊	雞
総数	4,183	2,080	5,283	555	817	25,364
社会主義部分	2,643	1,093	2,991	442	552	6,663
国营部分	546	215	819	96	219	1,072
農協部分	2,097	878	2,172	346	333	5,591
組合員附帯地	438	361	957	18	80	8,411
私的経営	1,070	609	1050	90	170	7,067
種畜場	32	20	285	5	15	3,223

- 註 1. Statistická Ročenka 1959. P. 246 より作成。
 2. 単位は 1,000 頭。
 3. 1959 年度全国のみを示す。

チエコスロバキア社会主義共和国における農業生産及び生産組織

二五八

次に、これら作付作物の一ヘクタール当り生産量によって、土地生産力の高さをみると、第28表の如くである。先ずJZDにおいて、最高のヘクタール当り生産高を示す作物は、ライ麦二〇・〇クオター、大麦一八・三クオター、燕麦一八・四クオター、アブラ菜一二・七クオター、種けし五・二クオター、亜麻二四・六クオター、甜菜三〇七・四クオター、飼料用草類四八・五クオター、牧草三七・八クオターであつて、一四作物中一〇作物が、JZDにおいて、ヘクタール当り最高収穫高をあげているのである。

これに対し、その他経営、即ち主として私的独立経営において最高を示すものは、莢豆一一・五クオター、馬鈴薯一一八クオターの二作物に過ぎない。

ここでも、今日のチエコスロバキアにおけるJZDの優越性が示されているといえるであろう。

最後に、家畜生産における役割を示すものとして、第29表を掲げておこう。

ここでも、JZDの家畜生産における優位性が、まぎれもなく確立していることを知らされるが、興味のあるのは、組合員附帯地における家禽が

最高を示していることである。

以上の諸統計の検討を通じていえることは、JZDが、一九五〇年以降約八年間という短時日の間に、チェコスロバキアの農業生産において、その基幹部分を成功的に掌握し、生産組織の基本的形態としての地歩を確立したということではなければならない。

むすび

序において既に述べた如く、今日我国におけるチェコスロバキア社会主義共和国についての研究は、極めて寥々たるものに過ぎない。この小論は、チェコスロバキアにおける農業生産と、その生産組織について、序論的に発展過程と現状を分析したものにすぎない。しかし、この小論においてすら、極めて明らかことは、チェコスロバキアにおける農業の社会主義的再編成が、一九四九年以来わづか一〇カ年という短時日の間に、成功的に遂行されたという事実である。

農業における社会主義的改造の問題は、一般に長期且つ困難な過程として、忍耐と説得、何よりも社会主義生産組織の実利的優越性を独立小生産者に示すことが求められる。チェコスロバキアにおける短期間での成功は、これらの諸任務がチェコスロバキア共産党を中心とする、労働者と農民の实际的、合理的な社会主義的改造の努力が成功したことを、意味しているに他ならない。

農業生産協同組合、国营農場、機械・トラクター・ステーションの緊密な連繋と、その外の試験研究機関の实际的援助、国家による全面的育成政策の見事な成果が、チェコスロバキア農業の社会主義的建設を導いたことは、今

日、誰もこれを疑うことはできない。

小論を終るに当り、世界科学者連盟へ紹介の労をとって下さった柘植教授、また、チェコスロバキアへの招待を配慮して下さった、ロンドンの世界科学者連盟本部の方々、特にプラハ東欧本部の Zemeč 氏、それから、チェコスロバキア各地の国营農場、JZD、農科大学その他の農業研究機関で、私に研究上の種々の便宜と配慮とを惜しみなく与えて下さった方々に、厚く御礼を申し上げなければならぬ。